＝「協育」事例集＝

教育の創造

～地域「協育」のススメ（第１巻）～

大分大学から由布山・鶴見山・高崎山を望む（P43参照）

大分大学高等教育開発センター

Center of Development and Research for Higher Education, Oita University

2012.3

☆「協育」事例集☆

教育の創造～地域「協育」のススメ（第１巻）～の発刊にあたって

大分大学高等教育開発センター
センター長　山　下　　茂

「教育の創造」とうい本事例集の題名については、私自身が困惑しています。大上段にかぶったこの題名にはいささかの戸惑いを持ちながらも、あえてこの題名にしてみました。

戦後の教育改革によって日本の教育は大きく前進し、素晴らしい学校教育制度を確立してきました。まさに、日本流の「教育の創造」であったと思います。言い換えれば、「教育の創造」の中心は学校教育であり、そのことによる大きな成果をもたらしてきました。しかし、平成18年12月に改正された教育基本法から読み取れることの１つに、第13条に規定されたように関係者の協力（「教育の協働」）の大切さがあると言えます。

大分大学高等教育開発センター（以下「本センター」という。）では、改正教育基本法の趣旨を踏まえ、平成20年度から教育の協働（以下「協育」という。）に関する調査研究と指導者の育成事業を実施してきました。調査研究についてはこれまで３年間にわたってその結果を報告してきましたが、本センターの指導者育成の取り組みについては、ようやくその成果を報告できる段階になりました。本事例集は、この指導者育成講座修了生の育成と活動を中心に事例としてまとめたもので、「教育の創造」をこれまでの学校教育の創造から視点を変えて提案するものです。その内容は、子どもたちに身近な地域において、地域住民が、学校や家庭と一緒に子どもを育てていくという、地域の「協育」を進めていくことを提案するものです。

具体的には、コーディネーターの育成講座や教育資源のネットワーク化、大分県の現状など、「協育」のシステムづくりに関するものと、「協育」という観点で実施した事業・活動を報告するとともに、こうした取り組みを進める上での基本的な考え方を、過去３年間の調査結果からまとめています。

始まったばかりの取り組みですが、教育基本法に規定されたこの取り組みは着実に広がり、定着していくことと思います。しかし、それは子どもたちを育てる役割を担う大人の意識次第です。行政を中心にして多くの「大人」が動き始めるための資料としてご活用いただければと思っています。

なお、本事例集の作成に当たって、資料をいただきました大分県教育委員会、多くの事例の提供と編集を担っていただきましたNPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの方々に深く感謝申し上げます。

平成24年３月

目　　次

第１章　教育の創造～地域「協育」のススメ・その１～ …… 3

第２章　大分県における「協育」の事例 …… 10
第１節　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット会員の地域での活動事例 …… 10
事例１　別府ねっとプロジェクト（別府市） …… 11
事例２　「うーた」の里山林再生プロジェクト活動（大分市） …… 12
事例３　学校図書館ウォーズ シーズン１（中津市） …… 14
事例４　スポーツ少年団を核とした「協育」（大分市） …… 15
事例５　公民館活動における「協育」の取り組み（大分市） …… 16
事例６　「教育の協働」の地域づくりを目指して（大分市） …… 17
事例７　富士見が丘幼稚園「エコ」活動（大分市） …… 18
≪会員紹介≫ …… 20
第２節　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット主催のモデル事業 …… 22
事例１　読み聞かせプロジェクト事業 …… 22
事例２　富士見が丘幼稚園プロジェクト事業 …… 24
第３節　大分大学高等教育開発センター主催のモデル事業 …… 26
事例１　「子どもふるさと体験学inくにさき」の試み …… 26
◇協力：NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット　他
事例２　大分大学生のキャリア教育支援の取り組み …… 28
◇共催：NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット　他
事例３　第１回「協育」見本市の開催 …… 30
◇共催：NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット
：大分県「協育」ネットワーク協議会　他

第３章　地域「協育」推進の取り組み …… 32
第１節　大分県が進める「協育」ネットワークの取り組み …… 32
第２節　地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会 …… 34
第３節　大分大学高等教育開発センターの取り組み …… 39
１．NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの設立 …… 39
２．大分県「協育」ネットワーク協議会の設立 …… 41
《資料》 …… 43
☆NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットロゴマーク
☆大分県「協育」ネットワーク協議会ロゴマーク
３．情報プラットホーム「大分県『協育』ポータル」からの発信 …… 44

第１章　教育の創造～地域「協育」のススメ・その１～

中川忠宣（大分大学高等教育開発センター教授）

まえがき

あえてこのような大きなテーマで提案させていただくことについて大きな恐れを抱きつつ、反面、期待も持たせていただいています。なぜなら、これまでの教育が、学校教育制度の充実によって、子ども育ての機能があたかも学校に集中してしまったように錯覚し、学校教育のみに過度な要求が集中してきたように感じられるからです。これまでの各種調査においても、家庭や地域社会の教育力の低下については報告されており、その内容も指摘されています。反面、マスコミ等でも報道されていますが「教職員の多忙化」「基礎学力の低下」「運動能力等の低下」等々については、まさに学校教育のあり方を問うているがごとき内容です。家庭や地域住民が担うべき子育てが指摘されつつも、制度として子育ての機能を発揮しえていないと言えるのでしょう。こうした状況の中で、平成18年12月の改正教育基本法の第13条には、家庭、学校、地域住民がそれぞれの役割を果たしつつ、三者の連携・協力を強化することを規定しました。これを受けて、社会全体の教育力を向上させ「地域ぐるみで学校を支援し、子どもたちをはぐくむ活動の推進」という施策のもとに、学校と地域との連携・協力体制を構築し、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的とした「学校支援地域本部事業」が全国展開されることとなりました。

まさに、それぞれの教育力の発揮に関する取り組みはこれまでも法的根拠による事業を含め、様々な取り組みがなされましたが、「連携・協力」を法的に規定したということに大きな意義があると考えています。冒頭述べさせていただきましたが、「教育の創造」というスケールの大きなテーマへ目を向けた、新しい取り組みである「教育の協働」への期待について皆さんと一緒に考えていければと、三年間の調査から見えてきたものを提案したいと思います。

この提案は、これからの「教育の創造」を、「地域という一定エリアにおいて、多くの地域住民が、学校、家庭、地域における様々な教育活動に参画していく」という観点から、「地域『協育』」というシステム作りの施策に関する仮説を提案することとします。なお、この提案は、平成22年度に大分県佐伯市における意識調査等の考察を「日本生活体験学習学会誌（第12号　平成24年1月20日）」[*1]に論文投稿した内容を基にしておこなうものです。

私たちが、これまで述べてきたことは[*2]、地域の人々や集団との関わりをぬきにして、学校教育のみで子どもの成長発達は考えにくいということであり、家庭や地域おける人間的な関わりが希薄になっている今日、家庭、学校、地域住民が一体となって子どもに関わる重要性が声高々に叫ばれているということです。そこでこれまでは、児童生徒の基本的な生活習慣やコミュニケーション能力、学校へ行く楽しさ、学校支援活動の要望などを中心にして、地域からの学校への支援が、子どもや教職員へもたらす効果について報告してきました。その結果見えてきたものとして、地域住民と「学校教育活動」及び「学校外活動」をつなぎ、教育の協働（「協育」）を推進するためのコーディネート機能を確立する社会教育行政の役割について、仮説を提案することとします。

Ⅰ　調査結果の分析と考察

子どもの学校支援に関する現状・意識を分析したうえで、教職員の意識や取り組みを中心して、学校支援に関する専任のコーディネーターの配置の有無という視点から考察します。その前提としての地域住民のボランティア意識に関する資料を冒頭に提示しておきます。図1は、「地域でのボランティア活動に参加するとしたらどんな活動に参加するか」を示したものです。第2位の「環境保全や地域づくりのための活動」（31.2%）を大きく上回って65.9%が「子どものための活動」と回答していることから、子どもや学校への関心は非常に高いことがわかりました。

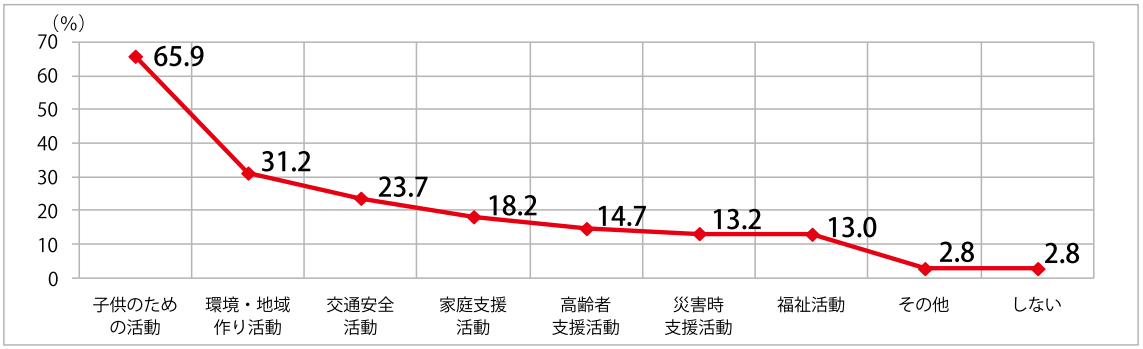


図1　参加したい（参加できる）ボランティア活動（N=1,060）

1　子どもの学校支援に関する現状・意識

(1) 学校支援の経験の実態

子どもの学校支援の経験については、小中学生全体の58.5%が「経験有り」と回答しており、学校支援に関しての子どもの評価は、全ての支援内容について多くの子どもが肯定的な回答をしています。その肯定理由を示したものが図2で、小中学生を合わせた割合では、「分かる・できるようになる」の回答が54.6%（小学生：54.5%、中学生：55.0%）で最も多く、「分かる・出来るようになる」ことは小・中学生ともに、子どもへの直接的な効果となっています。次いで、「楽しい」が52.7%、「褒めてくれる」が40.6%と高くなっています。

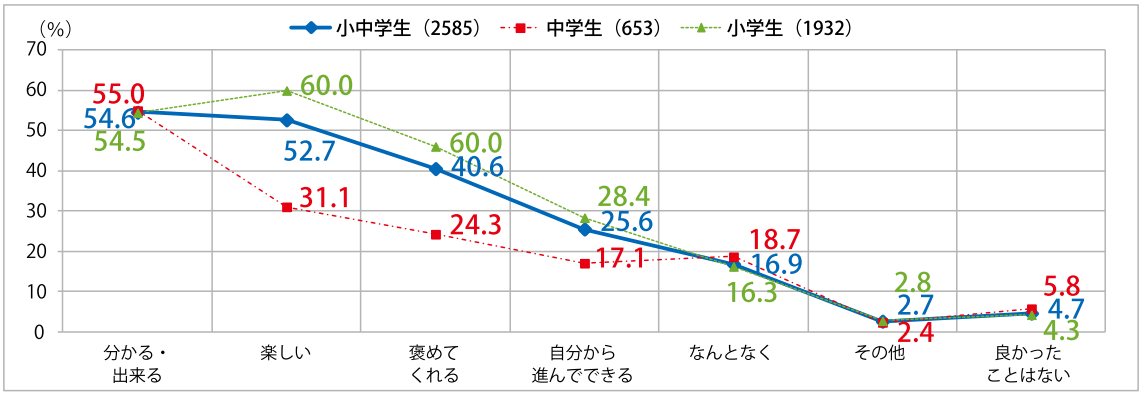


図2　学校支援が良かった理由（N=2,585）

(2) 今後の学校支援の要望

表1は交流・活動を要望する項目を示したものです。この表からも、学校支援を要望している子ども

ほど、「5教科」「他教科」「総合的な学習」「クラブ・部活動」「読み聞かせ等の読書活動」をして欲しいという肯定的な相関があることがわかります。

表１　学校支援の要望と交流・活動をして欲しいことの相関（N=4,399）p<0.01**

	5 教 科	他教科	総　合	クラブ部活動	読　書
支援要望	.251（**）	.343（**）	.356（**）	.273（**）	.304（**）

２　学校支援に関する教職員・地域住民の意識

図３は、学校支援による子どもや学校への効果についての、教職員と地域住民の意識を比較したものです。この図から、教職員と地域住民の意識の傾向はほぼ同じで、効果として教職員と地域住民ともに多いのは「住民の学校理解・協力」で、教職員は68.8％、地域住民は56.0％です。子どもへの効果としては、「子どもの安全」が地域住民では58.0％で教職員は52.4％、「校内生活への関心・意欲・態度」が地域住民では38.7％で教職員は46.1％となっています。また、学校支援地域本部事業が始まった時(H20.10)の全県調査と、2年間の実践後(H22.7）の佐伯市のデータを比較してみると、特に「授業の理解力・集中力への効果が期待できる」と回答した教職員が5.7％から17.9％と3倍になっていることもわかりました。

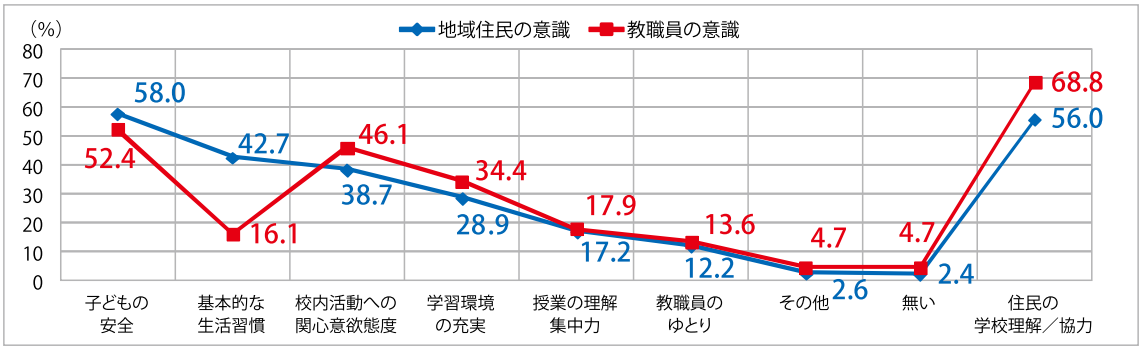


図3　学校支援の効果として期待されること（住民N=1058・教職員N=58）

３　コーディネーターの配置の有無による学校支援の状況

(1) コーディネーターの配置の有無による学校支援の現状

表2は、コーディネーターの配置の有無と高い相関がある項目を示したものです。コーディネーターが配置されている学校の教職員ほど、今後の推進方策としての「コーディネーターの配置」(.208**)、をあげており、受け入れている支援活動は「学習・実習サポーター」(.181**)、「コーディネーターによるボランティアの発掘・依頼」(.356**）に高い相関があることがわかります。逆に、コーディネーターが配置されていない学校ほど「学校行事への受け入れ」(.239**）が多いという相関があることがわかります。このことからも、これまでのような単発的な学校支援から、学校の多様なニーズに応えて支援していくためのコーディネーターの役割がみえてきたといえます。

表2　コーディネーターの配置の有無と相関が高い項目（N=505）p<0.01**

	推進方策：CNの配置	受け入れた活動：学習実習補助	受け入れた活動：学校行事	CNによる人材の発掘・依頼
CNの配置の有無	.208（**）	.181（**）	－.239（**）	.356（**）

(2) 学校支援活動推進上の課題

図4は、学校支援が必要でない理由（受け入れの課題）について、2つまで選択したものを3年分示したものです。課題としては「仕事量の増加（多忙化）」が最も多く、次いで「内部情報の保守」、「日程等に左右される」の順で、年々増加しており、教科活動など、子どもの学習支援という新たな活動が広がって教育活動が充実してきたことの裏返しとして、そのための打ち合わせや詳細な計画などにより増加しているという課題が浮き彫りになってきたと考えられます。比較して少なくなっているのが「事故責任の所在の明確化」、「予算の確保」であり、このことは、行政の支援やボランティア活動としての取り組みなど、教育の協働の推進が少しずつ浸透してきたことがみえてきます。

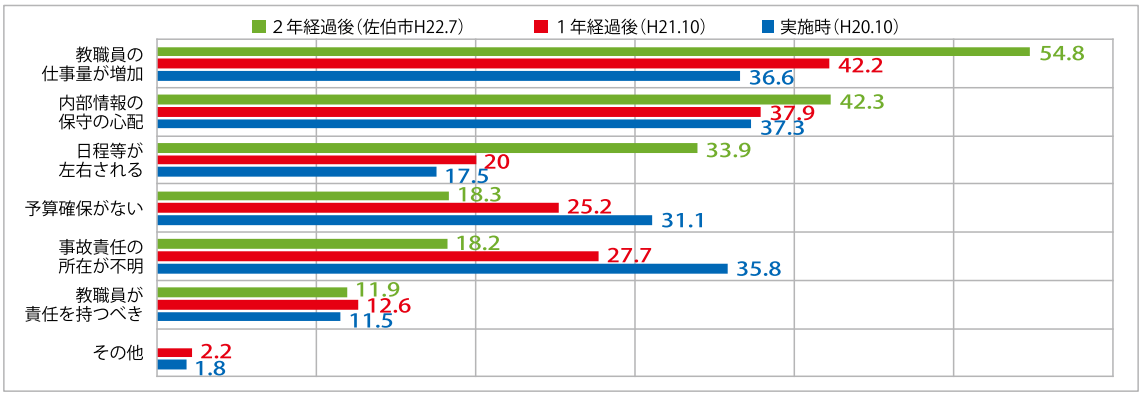


図4　学校支援が必要でない理由（受け入れの課題）

(3) コーディネーターの配置の必要性

表3は、今後の学校支援の充実方策として「専任のコーディネーターの配置」の項目について、学校支援との有意な相関がある項目を示したものであり、「今の学校教育においての学校支援の必要性」や「現在の勤務校への学校支援の必要性」に有意な相関がみられます。また、コーディネーターの配置が必要であると回答した教職員ほど、効果として「校内活動への関心意欲態度の向上」、「学校と住民の連携・協力が進む」と回答していること、また相関は若干低くなりますが「授業の理解力集中力」（.101*）との相関もみられます。

表3　コーディネーターの配置の要望の有無との相関関係（N=506/306） **p<0.01　*p<0.05

学校教育にとっての必要性	現在の勤務校への学校支援の必要性	効果：校内活動への関心意欲態度	効果：授業の理解力集中力	効果：学校と住民の連携	受入：読み聞かせ	受入：学習・実習補助	受入：安全パトロール
.249（**）	.253（**）	.213（**）	.101（*）	.158（**）	.150（**）	.177（**）	.153（**）

(4) コーディネーターの職務

図5は学校支援のキーパーソンとなる専任のコーディネーターの日常的な職務を示しており、県全体と佐伯市の傾向は同じで、「人材バンクづくり」（県全体：67.4%、佐伯市：87.5%）が最も多く、その他としては「チラシ・広報紙づくり」や「学校との定期的な打ち合わせ」、「公民館との連携」、「会議の企画運営」等を主な職務として行っていることがわかります。

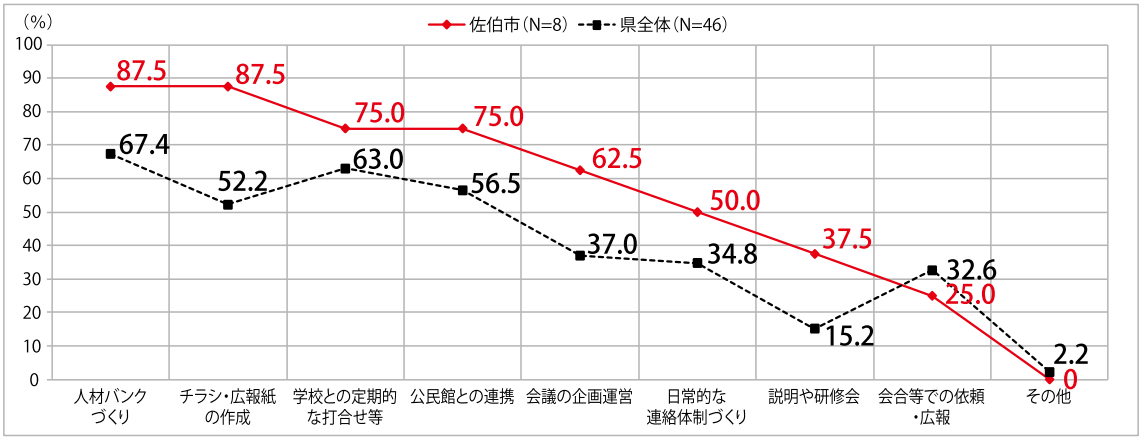


図5　コーディネーターの日常的な職務

4．学校支援の推進方策

学校支援を含めて、地域住民の子どものためのボランティア活動を推進する方策について、教職員と地域住民の意識を示したものが図6です。教職員と地域住民の傾向はほぼ同じですが、両者を比較すると、教職員は「コーディネーターを配置する」(64.5%)、「公民館等の行政組織が積極的にする」(33.7%)、「地域の様々な組織を整理・統合する」(22.7%) など、制度やシステム作りとしての行政の積極的な取り組みを望んでいることがわかります。

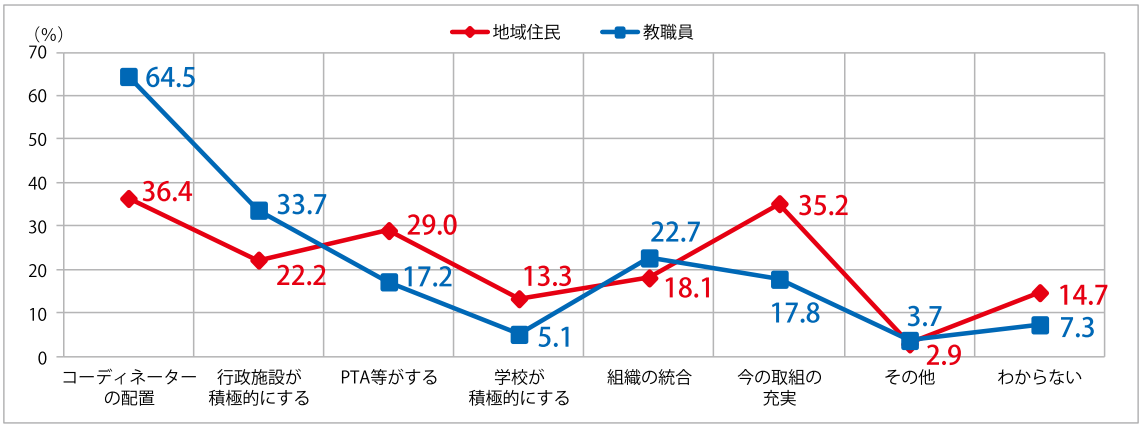


図6　ボランティア活動の推進方策（N=1057）

Ⅱ　調査分析から見えてきたもの

1　考察

学校支援を推進するうえで、受け入れを要望する教職員側の「課題」への対応をしない限り「教育の協働」は現実化しないと考えます。継続調査によって、教職員の仕事量の増加については、子どもの学習支援という新たな活動が広がって教育活動が充実してきたことの裏返しとして、そのための打ち合わせや詳細な計画などに関する仕事量が増加しているという課題が浮き彫りになってきたといえます。学校教育にとっての地域住民の支援の中身を精査して教育課程に位置づけた教育課程の編成が必要であり、学校教育の現状を踏まえたうえでの教育行政の方針と指導力・行動力が問われるところです。反

面、当初多かった「事故責任の所在」と「予算の確保」に関しては減少していることから、推進する立場の行政が行った継続的な各種研修会や地域住民への啓発と、専任のコーディネーターの活動などが連動した成果であり、今後の取り組みの基盤作りが出来つつあるといえるでしょう。

学校支援を含めて、地域住民の子どものためのボランティア活動を推進する方策について、教職員が一番に「コーディネーターの配置」（64.5％）と回答していることから、学校支援におけるコーディネーターの役割・存在の重要性が認識されたと言えるでしょう。教育の協働にはコーディネーターの存在がキーポイントであり、これまでに出来なかった教科学習への地域住民のサポートの取り組みの始まりや、学校教育への効果等の成果を感じる教職員が増加していることなどから、コーディネーターの配置による学校支援の取り組みや効果が明らかになったといえます。さらに、コーディネーターの職務の明確化や、職務のためのパートナーが必要であり、「コーディネート機能」がどう働くかが重要であることも明らかになり、「コーディネーターの配置で完結」ではなく、コーディネーターを中心とした「コーディネートシステム」の構築が重要であることがわかってきました。

２　教育の協働を推進するための「仮説」

これまでの調査研究から、潜在的なニーズや活動の際の要望等に応える、適切な情報の提供とマッチングを行える拠点を作ることが最重点施策であり、さらに、効果的なプログラムの企画等による取り組みを行いつつ、学校が抱える課題に総合的に対応して教育の協働を日常的に推進することを可能にする方策として、次の仮説が考えられます。

仮説1. 活動支援のためのプラットホーム機能の整備（主体の明確化）

①人材・活動等の教育資源情報のワンストップ化による収集・登録・発信の整備

②学校や地域おける活動と支援者を日常的に繋ぐコーディネートシステムの整備

仮説2. コーディネートスタッフ（ティーム）機能の整備・充実

①コーディネーターを中心としたスタッフメンバーの組織化

②ティームとして活動するスタッフの育成とティーム間のネットワーク化

仮説3. 子育てに関わる2割以上[*3]の地域住民の組織化とネットワーク化

①学習やボランティア活動を通した、地域住民の組織化

②個々の学校支援等の活動を通した、地域の団体・グループ、機関、企業等のネットワーク化

仮説4. 人、情報、学習資源を結びつけて調整し、ニーズに最大限に応えるプログラムのデザイン・提供

①学校教育活動への効果的な支援プログラムの企画・提案と活動支援

②学校外活動への効果的な支援プログラムの企画・提案と活動支援

青森中央学院大学の高橋興教授の調査研究においても、一人のコーディネーターによる支援ではなく、「組織」としてのコーディネート機能の発揮による効果的な支援の事例が紹介されており[*4]、今後、本仮説の検証を行っていく必要があると考えています。

Ⅲ　教育の創造～地域「協育」のススメ（第2巻）～へのつなぎ

学校においても教職員としては、学校支援の必要性を認識し、効果を理解したうえで、学校としてすべきことへの対応を計画的に行うことが必要です。様々な学校支援を受け入れることは「仕事量の増加

(多忙化)」につながりかねない懸念はありますが、より豊かな学校教育を行う上でどう受け入れていくかを共通認識する努力が求められます。そうした努力を通して学校支援が日常化し、支援者の広がりへと発展すると考えます。今は、その過渡期であることをいかに認識できるかが、今後の学校支援の充実の分かれ目になると考えられます。

今後、県及び市町村の教育行政が、子どもを中心においた学校教育と社会教育の融合を前提とした主体的なプランを策定し、対処療法的ではない、日常的・継続的な取り組みをすることが求められます。1つの教育機関が今の課題を全て背負うのではなく、「学ぶ気持ちを育てる家庭教育」「学ぶ意欲と力を育てる学校教育」「学びを深める社会教育」が協働し、学校教育支援や地域活動の充実と、地域の安全確保等のための総合的な「地域『協育』」が進められ、ネットワークが広がり、定着していく取り組みが求められていると言え、その施策が多くの方々によって模索されることを強く願っています。

注)

*1　地域との関わりによる子どもの学習活動の推進（Ⅲ）－コーディネーターの役割分析を中心に－
日本生活体験学習学会　生活体験学習研究　第12号 1-9　　2011年

*2　山崎清男・中川忠宣・深尾誠「地域との関わりによる子どもの学習活動の推進」
日本生活体験学習学会 「生活体験学習　第10巻」 2010年
山崎清男・中川忠宣・深尾誠「地域との関わりによる子どもの学習活動の推進（Ⅱ）
―地域住民の支援活動と教師の意識変化を中心として―」
日本生活体験学習学会 「生活体験学習研究　第11巻」 2011年

*3　学校支援を受け入れることは、一時的には教職員の多忙化（多忙感）の増大につながるかもしれない。しかしコーディネータの活用や学校支援活動のシステム化をはかることで、この問題は解決されると思われる。

*4　高橋　興『学校支援地域本部をつくる～学校と地域による新たな協働関係～』
ぎょうせい　2011年　79－163頁

注）文章中の表で示したp＜0.01及び*p＜0.05（「相関」）の見方**

○**p＜0.01は2つの項目の関係が0ではないという判断が間違う可能性が1%以下ということです。

分かりやすく言えば、相関を無視できる可能性が1%以下（99%以上は無視できない）ということですが、関連の強弱は相関係数の数値で判断し、関連が強い場合は数値が大きいということです。－がつく場合は2つの項目が逆の関係にある場合です。

*p＜0.05は判断が間違う可能性が5%以下ですから、**p＜0.01より相関が低いということです。

第２章　大分県における「協育」の事例

第１節　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット会員の地域での活動事例

事例１　別府ねっとプロジェクト

～別府市立朝日中学校ＰＴＡの協働の取り組み～

☆活動主体　別府市立朝日中学校ＰＴＡ　山本　美咲

事例２　「うーた」の里山林再生プロジェクト活動

～ふたつのきょういく（協育と共育）の共有～

☆活動主体　　うーたの会　加藤　俊一

事例３　学校図書館ウォーズ　シーズン1

～学校図書館整備支援を通して～

☆活動主体　NPO法人ミューディーズ　安倍　元子

事例４　スポーツ少年団を核とした「協育」

～新体操スポーツ少年団の取り組み～

☆活動主体　フレンズ新体操クラブ　石橋 紀公子

事例５　公民館活動における「協育」の取り組み

☆活動主体　大分市川添校区公民館　赤峯　友子

事例６　「教育の協働」の地域づくりを目指して

☆活動主体　大分市鶴崎地区教育懇話会　園部　秀靖

事例７　富士見が丘幼稚園「エコ」活動

☆活動主体　富士見が丘幼稚園　渕野 二三世

＝会員紹介＝

☆私のボランテイア活動　☆大分市　１期生：山上　伸子

☆子どもたち（学校）との温かい思い出　☆大分市　２期生：有田　哲則

事例１　別府ねっとプロジェクト

～別府市立朝日中学校PTAの協働の取り組み～

☆活動主体　別府市立朝日中学校PTA（別府市）2期生：山本　美咲

平成23年度から、別府市が「別府市地域教育力活性化事業」を立ち上げ、各地区公民館にコーディネーターを配置し、学校と地域をつなぐパイプ役となり「育て別府っ子！地域の力で！」を実現するための取り組みを行っています。そこで、別府市立朝日中学校PTAは、社会教育行政の取り組みとNPO法人 大分県「協育」アドバイザーネットの「教育の協働」のモデル事業等と連携して「別府ねっとプロジェクト」事業を行いました。

１．大学生との楽習会

H23年6月、大分大学と別府大学の学生ボランティアによる「大学生との楽習会」を1・2年生の希望者を対象に「数学・英語」の2教科を試験直前の土日に実施しました。中学生は、年齢の近い大学生から教えられることで、とても楽しく出来ました。その際に、地域の学識経験者や関係諸団体の方たちと「教育の協働」について意見交換の場を設けることもできました。

２．「子どもふるさと体験学inくにさき」への参加

8月、子ども達の体験活動支援として、大分大学高等教育開発センターの公開講座「子どもふるさと体験学 inくにさき」に、班長として生徒6名が参加しました。小学生から大学生までの異年齢との共同生活、多くの大人たちとの活動、くにさきの「人・文化・自然・産業」に触れる活動・体験を通して、自分たちが住むまちの魅力を再発見し、地域の宝に気づくことが目的でした。様々なプログラムや幅広い異年齢の子ども達との関わりの中で生徒が成長していく姿がありました。

３．朝日村フェスタ2011

9月の「朝日村フェスタ2011」開催に向け実行委員会を組織し、テーマは「子どもが繋ぐ地域の輪」としました。初めての取り組みとなる事業で予算はゼロからのスタートでした。「協育」アドバイザーネットから、会場となる場所の確保や後援依頼、広報協力、協賛金集めなど全面的な協力を受け、円滑な運営をすることができました。

主な内容としては、子どもが主役となる祭りの運営を柱に「子ども屋台」を計画し、生徒が商品の販売、現金の受け渡し、在庫管理、集計・利益計算までを担当しました。販売方法の工夫次第で賞品が売れる売れない事の現実に向き合い、大人が生徒の動きを見守り、安心してお店の運営が出来ように大人の関わりかたに配慮しました。

大分大学高等教育開発センターのブースでは、朝日中学校区学校支援隊募集やフォトコンテスト、NPO法人大分県『協育』アドバイザーネットからは、読み聞かせのブースの出展など、未就学児も楽しめる場所の提供をしました。その際男子中学生も読み聞かせに挑戦するなど日頃見ることのない場面に遭遇しました。メイン会場の体育館では、誰でも参加できるイベントとして「くつ飛ばし大会」を開催し、2歳から70歳を超える年齢の方まで挑戦出来る仕組みを試みました。参加賞の賞品は、企業からの提供により実施することができ、また、アーティストの「山中カメラ氏」を呼び、本人指導のもと「別府最適音頭」を輪になって踊り盛会に終わる事が出来ました。

４．成果と今後の展開

多様な価値観が共存する現代社会において、子どもの育ちに何が必要か、やはり多様な連携や情報共有は不可欠。別府ねっとは、今後も社会教育との連携を図りつつ、対象となる人・地域への情報提供と協働に努め、今後も継続的に活動に取り組むことで、ニーズだけでなく、ワォンツを満たすための具体的なプログラムの構築を目指し、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの支援を受けながら活動の充実を図って行きたいと思っています。

事例２　「うーた」の里山林再生プロジェクト活動

～ふたつのきょういく（協育と共育）の共有～

☆活動主体　　うーたの会（大分市）1期生：加藤　俊一

こどもが作ったふくろう⇒「みずなら」の木に設置　※30体

大分市の東部に位置する横尾地区、ワールドサッカー開催の大銀ドームや大型商業施設のパークプレイスの東に位置しています。そこが当会が活動している「うーた」（大田がなまった地名）の場所です。左右は低い山、山間（やまあい）は平地で、40年前までは地名の由来にあるように「大きな田（大田）」で、里山の風情を醸したが、その後耕作放棄地と化し、荒廃がどんどん進んでいきました。そこには「離農」を象徴する一方の現象として、サッカードーム、大型商業施設の建設も相俟って、この地区がここ数年、共同住宅が林立する地区へ変貌してきていて、初夏に乱舞していたホタルの数も年々減少していき、昔ながらの田園のやすらいだ風情が日ごと失われていく大きな変化を呈していました。この地に古くから在住の地域の人々には、離農のやむない事情が最優先し、自然、子どもへのかかわりなどに対する考えを大多数の人が喪失してゆく摂理はやむを得ないものであったでしょう。

今から7年前、「ホタル再生」をテーマに「ホタルの里活動」が公民館活動の位置づけでスタートしました。学校の「土曜日休み」に伴った大分市のホリデイプラン事業がきっかけで、子どもたちが学校休暇日にすごす場所づくりと「ホタル再生の環境づくり」が具体的な目標でした。荒廃した耕作放棄地の草刈り整備、左右の低い山の竹林、雑木整備を進めてきて、「春の鯉のぼり上げ」等を子どもたちに提供したり、水田を再生して5年生の田植え・稲刈りの提供等、子どもづくりを重ねた活動をしてきました。そして3年前から、「うーた」の里山林再生プロジェクト活動にテーマを拡大し、強い意欲と夢を持ち続ける有志が再結集し、以下の新たな活動をリ・スタートしました。

１．活動フィールドの倍増

２．「うーたの里山」のグランドデザインの再設計

・竹林の全面整備と跡地植樹　※やぶ椿など
・ホタル1000匹環境整備
・ビオトープづくりと生物多様性再生
・こどもワールド（ふくろうの森）づくり
・アサギマダラ環境づくり
・縄文時代の生活体験再現研究

３．活動メンバーの拡大

県内ボランテイアに拡大、近隣中学生・近隣自治会・地域有志・地域婦人会の定常的な参加、近隣の横尾遺跡と連携した活動の陣容強化、企業の参加（CSRの場）

４．基本的な目標

・自分づくり・子どもづくり・地域づくりの3づくり……協育と共育の取り組み
・さらに低炭素づくり・生物多様性再生の地球環境保護の可能性・ホタル飛翔数1000匹の実現
・そして里山再生による地域の集いの場所づくりと小学生児童の自然体験活動の実践と併せて横尾遺跡に由来する縄文の生活体験活動の実践
・また地域内外・異年齢間のコミュニテイ交流とそれぞれのキャリア・生涯学習の思い

等、協育と共育の深層を極めたアカデミックな活動

への転換を進めてきています。

リ・スタート3年目の平成23年度の活動について、グランドデザインのひとつである「こどもワールド～ふくろうの森づくり～（ここには、ふくろうが生息している）」を中心に紹介します。まず活動の全貌は、毎月第2土曜日を定例活動日として4月から12月までの9ヶ月間の活動参加者は、延べ370人（地域内177＜中学生45名を含む＞、地域外193）を数え、草刈り、竹林整備を毎月のプログラムに、ビオトープづくり、アサギマダラ誘致環境づくり、ホタル沢環境整備、オオイタサンショウウオ育成などに取り組み、それぞれの目的を達成しつつあります。

そして、9月と11月に「ふくろうと縄文の収穫祭」ワークショップを定例日とは別に実施しました。9月は小学校で「ふくろうの土器づくり」をして、11月に、写真のような「ふくろうの森づくり」と「縄文の秋の収穫祭」をジョイント開催しました。11月は、小学生20人、中学生16人、大人19人が集い、『縄文人の家族になって躍動！』をテーマに秋晴れの下、お昼は、しし鍋・竹めしをふるまい、半日を締めくくりました。

この活動を通したこの段階の子どもたちの発達過程にどんなプログラム視点が最適か、「協育」をどうしたら良いのか、少し考えた末、以下をテーマに描いてみました。

○家族の一員としての縄文の子ども～縄文のおにいちゃん・おねーちゃん～縄文のおかあさん～縄文のおじいちゃんになりきり、それぞれの世代の役割を演じる

○とにかく自然の中で活発に動きまわり、自然と空に向かってのびのびふれあう

○集団行動の規律を守る

とし、基本的な狙いを「子ども段階のキャリア形成」におきました。

はじめのあいさつ、子どもによる「楽しみます宣誓」、家族分けをして、縄文の衣装をつくり、その後、各家族グループ別に猪狩りの弓矢体験、石斧によるきこり体験、黒曜石のカッテイング体験、そしていのしし鍋と竹めし体験。兄姉が弟妹を教え、祖父が一緒に交わり、母が見守る、そんな雰囲気。縄文の衣装づくりの文様描写は、それぞれの子どもの個性が出て、石斧のきこりは、中学生でも大苦戦していたが、切り倒した時の歓声、弓矢は誰も猪と鹿の的を射止められなかった悔しさ、中学生は弟妹のことを忘れ、がむしゃらに弓矢に挑む様子、しし鍋と竹めしのお代わりをする中学生、おわりの会で子どもたちのすなおな振り返りの発言、そんな多くの情景を視野に入れ、自身も縄文のおじいちゃんを演じながら、満足な気持ちに浸っている私がそこにいました。

「すなおで、げんきで、かしこい子ども」、子どもの頃に母親がいつも言っていた言葉を私の信条として活動をしています。子ども段階の全てを象徴していると思っています。

この活動の「協育」と「共育」を評価した時、需給関係の中で、その意識が双方にあるかのマッチングを考えます。少なくとも供給側の大人にはどんな意識があるだろうか。そんな深層を求めることは無理があるかもしれません。アカデミックに体系化されたものでなく無体系、無意識に「協」と「共」が行われている関係、それで良いのかもしれません。

そういう思いに達した時、ささやかですが「協育」と「共育」の共有を果たし得たとの思いを持った秋の1日でした。

縄文の子ども衣装づくり　※縄文文様

縄文のこどもイノシシ狩り

事例３　学校図書館ウォーズ　シーズン１

～学校図書館整備支援を通して～

☆活動主体　NPO法人ミューディーズ（中津市）　２期生：安倍　元子

１．活動内容

◇大分県中津市内学校図書館支援委託事業

平成21年度より23年度まで中津市委託事業として市内小中学校図書室蔵書のデータベース化を実施。データベース制作作業に留まらず、図書室の環境整備、読書推進のための読み聞かせ、ブックトーク、推薦図書選定、また、教員・生徒と共に図書室の環境整備などを行い、学校図書館司書の必要性を提起しました。

◇大分県立中津南高等学校図書室整備支援

平成23年度3ヶ月間において、大分県立中津南高等学校の新校舎建築に伴う図書室移動のための蔵書の廃棄、整理の支援をしました。その際、中津市や大分県内の人物・事象に関する古文書や、貴重な資料の存在の有無を詳らかにするため、限定的ですが、研究的関心を持っておられる方々に呼びかけ、選別指導を依頼し、それを補助しました。

◇東九州龍谷高等学校図書室整備支援

平成23年度10月より東九州龍谷高等学校の図書室移動のための総合的支援として、蔵書仕分け、古い分類及びバーコード剥ぎ取り、図書選定、新刊案内、蔵書登録、新図書室の環境整備等の支援を進行中で、平成24年4月の再オープンを目標に現在作業中です。

２．需要と供給のマッチングの試み

中津市内においては図書整理等の需要自体が認識されにくい状態です。一定程度蔵書を抱えていて整理が必要だが人件費などが見込めない等の事情がある場合、ボランティアとして関わらせていただく方針で取り組んでいます。

３．コーディネート機能の実践

◇大分県立中津南高等学校図書室整備支援

蔵書整理時に発見した福澤諭吉関連資料についての情報を中津市立小幡記念図書館へ伝えることにより、中津市文化振興課、中津市立民俗資料館の担当者による資料の選別が行われました。また、中津南高等学校より、大分県立図書館へこの情報を伝達していただき、より専門的な視点からの選書が行われました。

更に、福岡県豊前市教育委員会及び求菩提山資料館のスタッフの方にもご協力をいただき、中津南高等学校の許可を頂いた上で資料の提供の機会を作りました。

◇東九州龍谷高等学校図書室整備支援

NPO法人中津文化研究所に、選書、選別におけるご協力をいただきました。

４．成果と課題

東九州龍谷高校では、発見した資料を学校の許可を頂いた上で提供の機会を作り、それを発端にNPO法人中津文化研究所によって市内銀行において資料展を開き、広く市民に公開するという運びとなりました。

また生徒（当高校の図書部員等）が、教員や地元のNPOと協力し、共に図書整理作業をすることを通じて貴重資料の存在や重要さを再認識する機会がもてたことは、これからの学校図書館づくり及び運営において大きな足掛かりへとつながるものです。学校図書館に司書が設置されれば、学校司書と司書教諭の協働によって児童生徒の学習環境が飛躍的な伸びを提供できたのではないでしょうか。

市内小中学校図書室において、図書担当の教員の方々が学校図書館司書の重要性についての認識を持つきっかけを作り出すに至ったと自負しています。

課題としては、資料蓄積のある一般施設と、公共図書館や学校図書館等の地域の機関をつなぐ取組を提案していけるよう努めていきたいと考えています。

５．教育の協働を行う視点

様々な内容の蔵書をどう整理し、分類し、提供していくかという面で私たち司書の専門性が大いに問われるものです。この能力を更に高めるには、常にニーズにどう応えていくかという緊張関係が重要になってくるため、このような図書、蔵書に携わる機会を数多く経験し両者の発展に繋がる取り組みを大切にしたいと考えています。

事例４　スポーツ少年団を核とした「協育」

～新体操スポーツ少年団の取り組み～

☆活動主体　フレンズ新体操クラブ（大分市）　3期生：石橋　紀公子

スポーツ少年団は県内随所にあり種目も多岐に渡ります。しかし男子に比べ女子が参加出来る種目は比較的少なく、又近年には子供の体力低下、社会性の欠如が問題となっています。こういった状況下の平成5年にフレンズ新体操クラブを母体として新体操スポーツ少年団は誕生しました。以来、体力づくり、仲間づくり、地域に根ざした活動、また指導体制の充実を図りながら活動を行なっており、現在大分市内全域と津久見市内で活動を行なっています。以下、「協育」の立場より平成23年度実施した具体例を上げます。

１．地域との連携

＊川添すこやかホリデープラン推進事業への参加

校区自治会、小学校、PTA、大学、他多くの団体が連携し開催されている本事業を子供達は毎年楽しみにしており、本クラブ指導者も役員として参加しました。

○九六位山野外体験活動（7月）

大学生の補助で野外レクリエーション、飯盒炊爨、カレー作りを体験した。技能保存会から「ぶんぶんゴマ」を頂き、昔遊びも楽しんだ。

○大野川ハゼ釣り大会（10月）

釣り糸をたれ秋の一日を楽しんだ。河原で頂いた揚げタコとポテトはまた格別。

○凧作り凧揚げ大会（1月）

北風を受け、思いっきり舞う自前の凧に大満足。カレーや揚げタコでおなかも大満足。

＊文化行事への参加

川添ふれあい祭り(11月)、豊府祭り(11月)、津久見児童文化祭(2月) などに参加し、日頃の活動の一端を披露する機会を得ており、多くの方々からの拍手は子供達の活動の励みになってます。

＊指導者の地域参加

学校や公民館行事へ本クラブ指導者を積極的に派遣しており、中でも川添健康講座では日頃お世話になっている地域の皆さんへ健康体操の指導をする機会を得ています。(4月～1月・12回)

２．リーダー育成

スポーツ少年団では指導者の補助や小学生団員のお姉さんとして活動する団員をリーダーと呼んでいます。又、指導者と保護者が連携し積極的な活動を支援しています。

３．団を越えた交流

＊新体操スポーツ少年団全団交流合宿（5月）

団員相互の親睦を図るための合宿で、リーダーは担当指導者と共に事前にしおり作りやレクリエーション指導の計画を練って合宿に備えます。寝食を共にし、上級生が下級生の世話をしながら野外で、屋内で様々な活動を行い、団員がもっとも楽しみにしている合宿で、指導者も保護者も連携し活動を支えています。

４．大分大学との連携

＊障害者と大分大学とのダンス交流発表会（2月）

障害者や大学生と共に舞台でダンスを踊り、又新体操の演技を披露する機会を得ており、障害者が持つ豊かな感性は団員にとって多くを学ぶ好機となっています。

＊地域連携推進事業への参加（10月～3月）

指導者が学生や教官と共に地域に出向き「転倒予防教室」で指導を行なっており、高齢社会での健康維持に新体操指導の経験が活かされています。

５．保護者・指導者向け研修

（新体操スポーツ少年団主催事業）

＊スポーツ講演会（10月）

関係者以外へも広く案内し参加者を募り、「上手な体のつかい方」をテーマに、中央から渡會公治先生を招きケガや障害予防の知識やトレーニングを学びました。

＊テーピング講習（12月）

指導者及び保護者対象に、トレーナーよりケガや障害の処置を学んだ。

■まとめ

社会教育団体としてスポーツ少年団が地域で果たす役割は大きく、新体操スポーツ少年団が今後も魅力ある活動を展開するために、今後も地域の団体や学校とのより良い連携を模索し、アドバイザーネットからの情報発信を広く関係者に伝えて行きたいと考えています。

事例５　公民館活動における「協育」の取り組み

☆活動主体　　大分市川添校区公民館（大分市）　３期生：赤峯　友子

川添校区公民館は校区の社会教育の拠点として地域住民への情報提供と生涯学習の場の提供を行っています。現在は地域コミュニティー再生の拠点としての役割も大きくなっており、平成14年度からの完全学校週5日制に伴い、子どもの健全育成のための事業や学校支援に力を入れています。

１．すこやかホリデープラン推進事業

九六位山や大野川といった校区の自然と地域の人材を活用し、児童の体験活動を通して地域の教育力の向上を図る目的で実施しています。「地域の子どもは地域で育てよう」のスローガンのもと、小学校、PTA、自治部会、大学生、スポーツ少年団等で実行委員会を組織し、体験活動の場を提供しています。

①九六位山野外体験活動

九六位山のキャンプ場で、野外体験活動（飯盒炊さん、カレー作り、竹の器作り、火おこし体験、そうめん流し）を行います。大分大学の学生ボランティアがレクリエーションや指導にあたり、APU留学生も参加して、異文化交流を行っています。

②大野川ハゼ釣り大会

大野川で子ども達と地域住民とでハゼ釣大会を行っています。自治会で手作りの竿を準備したり、竿の修理や釣りの指導をしています。地域の消防団や派出所のお巡りさん、国土交通省、大野川漁協の皆さんにもご協力いただいています。同時にAPU留学生のホームステイプログラムを実施し、ホストファミリーと焼肉大会をし、各国の郷土料理を作ったりして、交流を深め、参加した留学生とは現在も交流が続いています。

③大野川たこづくり、たこあげ大会

技能保存会の指導でたこを作り、大野川の土手でたこあげ大会を行います。

２．ビーチアニマルの作製

子ども達にものづくりの楽しさを伝えたい公民館運営委員の有志でビーチアニマルを作製しました。校庭で作業をしましたので、子ども達も授業の一環として見学に来て、みんなで「川添くもアニマルくん」と名づけてくれ、小学校に寄付しました。

子ども達の体験学習をはじめ、昔の遊びや校区の歴史を学ぶ学習、平和授業などの指導者を紹介し、芋植えやしいたけのコマ打ち体験などを行っています。たこづくりや竹細工は技能保存会、だんご汁づくりやキャラ弁づくりは女性料理教室の皆さんにお願いしています。子ども卓球教室は大人の卓球教室の皆さんに指導していただいて10年目を迎えます。また、小学校の先生方の研修を公民館の陶芸教室の教室生がお手伝いしたり、歴史散策の講師を歴史ボランティアガイドで行うなど、学校支援に力をいれています。学校や子ども達の役に立つことは地域の皆さんの生きがいになっています。

３．校区住民との交流事業

①校区ふれあいまつり

地域、学校、PTAの三者で協働開催し、今年で12回目を迎えました。公民館の生涯学習まつりと小学校、PTAの日曜PTAを一緒に開催し、芸能大会に小学生やスポーツ少年団が参加、日曜PTAの「地域の先生」では地域の人が講師をしています。今年はビーチアニマルの展示も行い、特別講演会は「テオ・ヤンセンの世界」と題し、大分合同新聞社の佐々木企画部長の講演を行いました。

②校区囲碁・将棋大会

地域の人が子ども達に囲碁や将棋を指導するなどして、交流を行っています。

成果と課題

すばらしい自然や昔の文化に触れ、体験活動を通して子ども達の郷土を愛する心が育ちました。異年齢の人たちとの交流、異文化交流を通して、ものの見方、考え方について学ぶ機会を提供できました。また、地域住民と子ども達の交流、大学生や留学生との交流を深めるなど多くのふれあいの場を提供できました。現在の公民館で実施している事業や学校支援にアドバイザーネットの皆さんの情報やアドバイスをいただき、さらに充実したものにしていきたいと考えます。

事例６　「教育の協働」の地域づくりを目指して

☆活動主体　大分市鶴崎地区教育懇話会（大分市）　1期生：園部　秀靖

「おおいた教育の日」関連行事として、平成23年10月22日（土）に鶴崎地区公民館集会室で、約130名の参加を得て教育講演会・シンポジウムを開催しました。

１．教育講演会・シンポジウム

昨年度は「協育」アドバイザーネット会員（元由布市「協育」コーディネーター）梅野悦子さんに「子どもが心豊かに育ち、地域も元気になる地域教育」という演題で講演をしていただきました。ここでは「豊な経験、識見、行動力に感動しました」、「地域連携の具体策が今後の学校経営の参考になった」等々の多くの共感の声を聞きました。今回は、関係者の更なる「意識づくり」をねらい「大分の未来～学校支援を通した『教育の協働』～」と題して、大分大学の中川忠宣教授に基調講演をお願いしました。

後のシンポジウムは、懇話会髙橋健次会長の司会で、佐用勇人鶴崎中学校校長、渕野佐地代高田小学校校長、福崎鶴崎地区青少協会長、野村廣幸鶴崎文化研究会事務局長それぞれの発言と中川教授の助言とで展開し、学校からは「地域の方々とのふれあいを通して人とのつながりや思いやり・優しくする心が生まれる。」「学校支援のネットワークが構築されていく中で子どもたちに、ふるさとを大切にしようとする気持ちが育ってきている。」という報告がありました。青少協から「大人が変われば、子どももかわる。」、支援団体からは「地域における善行の奨励と表彰の場を」という提言もありました。

２．懇話会総会

講演会に先立って、教育懇話会総会では、次記の提案が承認されました。①懇話会組織の拡充―連合老人クラブ・連合婦人会・高等学校・高校の退職校長会・私立幼稚園・商工会・農協・銀行等②事業内容の充実―講演会以外に学校や地域活動の発表の場を設定③地域の諸施設・人材等の活用―人材バンクづくり④開かれた学校―オープンスクールデ―や各種行事への地域住民の積極的参加・協力⑤学校毎の「教育懇話会」の実施。更には、掛川克義鶴崎小学校校長より「本校の学校経営について」の報告がなされました。

３．会場展示

当日、集会室背面にもの作り名人の作品及び各学校・公民館・諸団体の写真パネル等を展示しました。

①もの作り名人―神宮司昭夫（明治地区）竹笛・竹トンボ・コマ・風車等　田中喜久男（鶴崎）折り紙　野間弘子（鶴崎）絵手紙

②写真―○「うーたの会」（大東中生の縄文時代再現体験「水穴」掘り・明治小3年生ホタル幼虫放流後の自然観察等）　○「岡原花咲かそう会」（市民花公園のチューリップ植え・園児等の芋掘り体験）　○「鶴崎文化研究会」（お茶会・なんでもかんでも作品展・史蹟の清掃活動）　○「各学校（11校）」（田植え等学校支援の活動場面）　○各公民館（2館）」（もちつき・夏休み子ども教室等）

明治北小の「教育懇話会」―自治会長他

４．本年度の学校支援の新たな展開事例

①学校毎の「教育懇話会」実施―別保小・明治小・明治北小等

②明治北小6年家庭科「エプロンづくり」ミシンの指導（明治公民館・婦人会有志）

③川添小のビーチアニマル作り―「発想力やものづくりの力につながるとうれしい」（支援者）

④「豊後つるさき凧あげ大会」（凧作り指導―鶴小掛川校長・後援鶴崎文化研究会）

５．成果と今後の課題

今、前記「新たな展開事例」のようなニーズに応える支援の輪が広がってきています。地域における「教育尊重」の意識づくりのための更なる啓発活動と学校支援のネットワークづくりを地道に積み上げていきたいと思っています。

事例７　富士見が丘幼稚園「エコ」活動

☆活動主体　富士見が丘幼稚園（大分市）　1期生：渕野　二三世

１．活動内容

本活動は、幼稚園における「協育」の推進を目的とした「子どもエコプロジェクト」の活動と複合した幼稚園モデル事業として展開されました。また「読み聞かせプロジェクト」とも協働し取り組みました。今後、県下にある保育園・幼稚園にも『子どもエコと協育』を発展、拡大し、この活動を普及していくためのプロジェクトができることを願っているところです。本プロジェクトは、第1～ 5号の活動を幼稚園協育の教育課程と連携して実施しました。内容は以下の通りです。

◇第1号　緑のカーテン作り（5月：5歳児）

当日に至るまでに「協育」アドバイザーと事前の打ち合わせを何度も重ねました。当日の流れ、植えるプランターの形や大きさ等、念入りに確認したことで、幼稚園側の思いとコーディネーターの考えをすり合わせることが出来ました。スチロールプランターに子どもたちが飾り付けをすることを導入活動とし、当日は今年度より導入した「お母さんボランティア」の協力も頂きながら、子ども達の活動のサポートをしてもらうことで、子どもたちにとってはいろんな方とのかかわりの第一歩となりました。自分で植えたことで子どもたちは毎日アサガオの様子を見に行き、水やり等のお世話を楽しんで、7月にはツルも伸び、たくさんの花をつけました。

◇第2号　トマト植え（6月：4歳児）

「野菜を育てる」という経験は本園でも取り組んでいるが、4歳児が個人の植木鉢で育てるということは違った経験となり、とても良い活動となりました。当日は講師として農家の方に来ていただいて、トマトを育てることのポイントや、トマトの生長についてお話をしていただく中で、いろいろな色のトマトがあることを教えてもらった時には、子どもたちも“エーッ”と驚いていました。

◇第3号　親子でエコフェスタ2011
（8月：5歳児）

5つの活動のうち、最も大きなイベントであり、

「エコ」に強くこだわって取り組みたいという思いから、保護者を巻き込んでの活動を計画することになりた。「協育」アドバイザーのご指導のもと、初めて地域の方へのご依頼・ご案内を行ったとこ

ろ、快諾して頂きました。地域の中学校の先生や中学生をはじめ、日頃より交流のある自治会は、今回は特に沢山の方が来て下さいました。残念ながら、今回初めてということもあり、外部の方は見る形の参加でしたが、本園での取り組みを知ってもらう機会にはなりました。このプログラムにおいては、会場に「学校(幼稚園)」と「地域」と「家庭(保護者)」の3者が揃うという理想の形になったと思います。ネイチャーゲーム・蝉の生態のビデオ観賞・実物を見せながらの、めだかの話・エコ音楽会等、盛り沢山の内容で親子ともに満足の活動となりました。

◇第4号　親子でエコなものづくり（11月：3歳児）

外部講師として、ザ・キャビンの皆さん、大分大学生等をお迎えして活動を行いました。落ち葉や木枝など、身近な自然物を存分に使った製作は、親子にとっては大変親しみやすいものであったと思います。作品自体も、幼稚園の活動に密着したものであったことから、子どもたちも抵抗なく取り組むことができたと思います。活動中には、外部講師（「協育」アドバイザー）の方々が積極的に声をかけて下さる場面も多く、自然とコミュニケーションを図ることもできていました。

◇第5号　親子でエコキャンドル作り（12月：5歳児）

廃油の回収と持参など、保護者の方々にご協力頂き、親子で一緒にキャンドル作りに励みました。出来上がったキャンドルの点火のシーンでは、温かな雰囲気になり、「協育」アドバイザーの方より保護者向けにエコクイズを実施してもらい、楽しみながらエコについての知識が得られることになりました。また、より「エコ意識」を高めてもらうために、大分県地球環境対策課の方にも保護者向けのお話をして頂くなど、公の方が入ることで、新たな視点で、この取り組みに対する理解やサポートをして頂くことができたことも良かったのではないかと思います。

◇読み聞かせ　～5回を通して～

降園時のバス待ちの子ども50名(2～ 5歳児）を対象に行いました。季節に合ったものや子どもの興味・関心に合わせたものという観点で選書を行いました。選書には神経を使うことになったようですが、子どもたちに良い絵本を読み聞かせしたいというねらいがあるために、毎回協議を重ねていきました。このように、大人が真剣になることで、子どもたちは、絵本の世界に引き込まれていき、ストーリーを楽しむことにつながっていきました。読み手が変わっても子どもたちは集中して楽しんでいる様子がみられました。

２．成果と課題

モデルとしての取り組みであったことを含め、教職員をはじめ、保護者の方々にも十分に説明し、理解していただくことからスタートしたプロジェクトでした。半年間の活動の中で初めてのことばかりで、当初は戸惑うこともありましたが、念入りな打ち合わせを重ねることにより、トラブルなく終えることができたと思います。ただ、園としては幼稚園本体の仕事もあるため、打ち合わせは端的に行うということが大きなポイントです。ただ、何度も打ち合わせが必要となると、県下の幼稚園に広げていくには無理が生じるだろうと考えられます。また、外部の方が中心となって活動を行う場合は、園の方針とズレないよう、事前の顔合わせや詳細の打ち合わせ（どういうことをしようと考えているのか。どの場面でしようとしているのか等）が必須です。また、「協育」アドバイザーと幼稚園の双方が、それぞれ子どもたちに何を経験させたいのか？　また、どういう方法が適切なのか？　等をしっかり共通理解しあうことで初めて良いプロジェクトが推進できるということをあらためて感じました。そのためには、まず、この「協育」アドバイザーネットの趣旨を十分に各園に伝えていくことが不可欠です。

会　員　紹　介

私のボランテイア活動

☆大分市　１期生：山上　伸子

大分市の中心部大分川の東側に位置する滝尾校区が私の主なボランテイア活動をしている地域です。

私の活動の１つめは、子育て支援を中心にしたボランテイアと地元の民生委員児童委員として私の住んでいる町の皆様の様々なお世話をする活動です。

子育て支援の主なものは、①地元小学校の放課後育成クラブで絵本の読み聞かせや紙芝居の実演。②大分市のふれあい学びの広場事業のひとつである学習支援わんぱくひろばの支援を地元南部公民館より依頼され、10月から2月まで読み聞かせ活動をしたこと。③大在公民館、三佐公民館で大学生の皆さんと読み聞かせを実演したこと等々たくさんあります。

2つめは、メインの活動ですが、地元、校区公民館での「子育てサロンぽっぽたきお」のスタッフとして運営に携わってきたことです。平成23年度に活動した内容を一部紹介してみます。

春は、（親子でリフレッシュいきいき体操）

地元のお寺の住職の奥様が先生でヒップアップ体操、子どもを抱いて足裏のツボ体操、足指ジャンケンなどなど……

初夏は歯科衛生士さんによる虫歯予防の講演。

秋はミニ運動会、幼稚園のいも畑で芋ほり、

翌月にはおいもパ-ティー

一月は「鬼はそと」の豆まき

「今年もよろしく　みんなに福が来ますように」と題して地元の社協と青少協の事務局長が鬼になって楽しい「鬼はそと」の豆まき……。豆は痛いので新聞紙をまるめてにぎやかに鬼ごっこ。むかしの遊び、はないちもんめ等でママ達も童心に戻ってのティータイムはほっかほかの甘酒まんじゅうで交流の花が咲きました……。

以上、私の一年間のおせっかいおばさんの活動のあらましを紹介させていただきました。これからは「協育」という言葉を大切にして、地域の方々と一緒に「おせっかいおばさん」として頑張ります。

子どもたち（学校）との温かい思い出

☆大分市　2期生：有田　哲則

我が家の裏山から子どもの声。だんだんと近づいてくる。平成20年2月7日(木) 16時頃のこと。そして、椎茸のホダ木を伏せてあるところに来た。「キノコがあるぞ」と言う声と共に棒で叩く音。急いで現場に行くと、6人ほどの子ども達が椎茸をたたき落としている。「君たちは何をしているのか。この椎茸は栽培しているんだぞ」と言い、学校名とそれぞれの名前を書かせる。翌朝、小学校を訪ね、校長先生に事情説明して「決して子ども達を叱らないでください。興味本位やおもしろ半分でやったことでしょう。学校から注意だけはしておいてください。」と言い残し、学校を後にする。

翌日、校長先生から電話で「一人の子どもの保護者がお詫びに伺いたいと言っているのですが……。」と申し出ありました。私は、「こんな事は子ども達の成長過程にはつきものです。私の子どもの頃もそうでした。詫びに来る必要などありません。」と丁重にお断りしたところです。

二週間ほどして校長先生が突然訪ねて来られて、「椎茸はどのようにして出来るのか、ということを子ども達がまとめたものです。有田さんに見て頂きたいと思って持ってきました。」と……。

見ると、なんと正確に椎茸が出来るまでを図と文字で書き表していることに少々驚きました。「校長先生、子ども達がここまで調べたのであれば、私としては是非とも駒打ち体験をさせたいですね。すでに大野町の山にクヌギを玉切ってあるんです。一部を私の軽トラックで学校まで持っていきます。授業に差し支えないようであれば考えてみてください。」と言う。その後、駒打ちの話がまとまりました。

学校側と打ち合わせた日時に、準備万端整えて小学校へ！。椎茸栽培の話をしたあと作業開始です。駒打ちは初めての子がほとんどで、一人だけ「おじいちゃんの家でやったことがある。」という子がいましたが、子ども達の表情はそれぞれに輝いていました。電動錐を使わせて怪我をさせるようなことになっては大変なので、穴開け作業は自分が担当しました。そして駒を入れ、打ち込みは子ども達です。70人ほどの子ども達一人一人に体験させ、一時間ほどで終了しましたが、“未来あるこの子ども達の将来に幸あれ”と思いながら小学校を後にしました。

それから一年以上経ったある日、私が毎朝子ども達に声掛けをしている小学校の校長から「有田さんの家の椎茸をたたき落とした子どもの一人が、作文コンクールに応募して最優秀賞に輝いたんですよ。」と言って、その文集をいただきました。

読んでみて『ああよかった。子ども達は健やかに成長しているんだ』と、我が子が賞をもらったように嬉しかったという、子どもたち（学校）との温かい思い出です。

第２節　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット主催のモデル事業

事例１　読み聞かせプロジェクト事業

【報告】2期生：佐藤　真由美

大分県においても読み聞かせボランティアや保護者による読み聞かせにより、読書離れが食い止められつつあります。こうした中、私たちは、この「協育」アドバイザーネットの取り組みとして、幼・小・中・高校生への読書支援活動とともに、乳幼児の父母や祖父母など、子どもにとっての身近な人による読み聞かせを広げるための活動を実践しつつ、読み聞かせのあり方の工夫・研究を進めています。

１．「富士見が丘モデル」読み聞かせ事業

大分市横瀬の「富士見が丘幼稚園」で「園児段階の発達を支援する協育」を主題に「子どもエコと読み聞かせ」を組み合わせた事業を実施しました。この企画は、読み手と聞き手である園児たちが絵本の素晴らしさを共に味わうことにより、園児たちが本への親しみを持ち、また、園内にある図書室の貸し出しにつなげたいということを目的としたものです。『富士見が丘モデル』事業は5回にわたり実施され、そのうちの3回に読み聞かせが入りました。「協育」アドバイザーネットとしての初めての『モデル』事業でもあります。

富士見が丘幼稚園においては、園の方針に基づき、すでに読み聞かせの活動に取り組まれていましたので、本会の活動は、園の保護者OBや園の関係者を中心に取り組んでいく方法を提案しました。打ち合わせにかかる時間的な配慮、及び選書、読み手の依頼等に理解を持って共に取り組んでくださった富士見が丘幼稚園並びに保護者の方々に感謝しています。

選書は、前半の各回のプログラムに関連付けましたが、時間的な面からも送迎のバス待ちの園児が対象となり、前半プログラムに参加した園児全員ということにはなりませんでした。（実施時間11時30分から20分間）しかし、そのプログラム自体が季節に応じたものであったことから、選書も季節や行事に添うことができ、子どもたちの心に十分届いたのではないかと思います。最後の一冊は、バスに乗って家路につく子どもたちの気持ちが自然と家に向くような絵本を選びました。また、目的の一つでもある「園内の図書室の絵本の貸し出しにつなげる」のため、園の図書室の蔵書から下記を選書にしました。

○6月18日　「トマトのひみつ」「ちいさなヒッポ」「ガンピーさんのふなあそび」など夏や水遊びに関係のある絵本。

○11月19日　「どんぐりぼうやのぼうけん」「くんちゃんのだいりょこう」「パンやのくまさん」など深まりゆく秋に関係した絵本。

○12月17日　「ハリーのセーター」「ドタバタクリスマス」「マドレーヌのクリスマス」などクリスマスに関係した絵本。

２．ブックトーク～読書の楽しさと幅広い書物の魅力を伝える推進活動～《大分市春日町小学校》

基本方針でも述べたように、読み聞かせにより、読書離れは食い止められつつあります。しかし、年齢が上がると「読み聞かせからひとり読み」への移行という時期がきます。そのために、自らページをめくり本を読むという読書の楽しみを子どもたちに伝えることができ、幅広い内容の書物に興味を持たせ、読書意欲を引き出すとされる「ブックトーク」の普及拡大が必要と考えました。実践校としての大分市立春

日町小学校は、大分県立図書館にも大分市民図書館にも近く、学校の蔵書に無い本も紹介できます。実演者として、県立図書館の講座修了生から成る「大分ブックトーク研究会」に依頼しました。当初、2学年6クラス、実演者は大分市在住ということで打ち合わせを始めましたが「大分ブックトーク研究会」とも相談し、学校側の希望に添う形で5学年15クラスに対応し、大規模な事業となりました。その結果、大分市在住者だけでは人材が確保できず、竹田市、豊後高田市、臼杵市など遠方から来てもらうこととなりました。「大分ブックトーク研究会」のメンバーは、北は中津から南は臼杵までに広がっており、これをきっかけにこのような事業が各地に広がっていく事を期待しています。

保護者にも読書の大切さと楽しさを伝えたいという学校側の希望もファミリーPTAで対応できました。

3年生　10月30日　テーマ（昔話）ファミリーPTAにて
1年生　11月18日　テーマ（昔話）昔話を読んでお友だちに紹介しよう
6年生　12月19日　テーマ（宮沢賢治）
・作品を通して作者の人となりを紹介
・実演者がそれぞれの視点から作品を紹介
4年生　１月31日　テーマ（科学読みもの）
5年生　１月31日　テーマ（椋　鳩十）『大造じいさんとガン』
終了後、作者及び生き物に関するブックトーク

本来なら、日常の児童・生徒の事をよく把握できている教師及び学校司書、司書教諭が行うのがベストではありますが、準備期間の確保やブックトークのノウハウを持ち合わせていない場合もあり、その技術を持っている人に協力をしてもらいたいという学校側の思いがあるようでした。今回は、「協育」アドバイザーネットから事業を学校側に持ちかけました。「大分ブックトーク研究会」という専門の技術を持った会の存在も大分県内にあまり知られていないのが現状のようです。県内各地に存在する読書に関する支援グループを学校や地域に紹介してつなげていく役割をしていきたいと思います。

３．別府市立朝日中学校「朝日村フェスタ2011」

9月18日、朝日中学校ＰＴＡ主催による「朝日村フェスタ2011」において、読み聞かせ及び紙芝居の実演、同会場にて読み聞かせの相談を行いました。

実演者は、「協育」アドバイザーネットのメンバー、朝日中学校の男子生徒、大分大学生でしたが、飛び入りで地元小学生、親父クラブのお父さんの参加もありました。

相談コーナーでは特に質問はありませんでしたが、日頃のボランティア活動の話を聞かせてもらい、情報交換の場となりました。

４．「赤ちゃんと絵本の出会い」～親の心を我が子へ贈る小さな試み～《大分堀永産婦人科医院》

堀永産婦人科医院には、産後1ヶ月のお母さんたちの「手と手の会」があります。赤ちゃんとお母さんの為の会で、医院スタッフが情報を提供したり、お母さん同士の情報交換の場です。毎回、30人弱のお母さんたちと3、4人の医院のスタッフ（助産師）の参加があります。絵本に関心をもっていた中心的スタッフの師長とお母さんになったばかりの人たちに「読み聞かせの魅力・素晴らしさを伝えたい」と産婦人科医院を探していた我々が出会い、同じ思いで始めた事業です。この事業を始めるにあたり、院長、師長をはじめ関係者それぞれの想いや考えを確認しました。9月より、毎月一回「手と手の会」にて、「協育」アドバイザーネットのメンバーが絵本の読み聞かせの実演と講話を行っています。食事やお茶の時間をはさんだ30分程で、とてもリラックスした雰囲気の中で行われています。二人目、三人目出産のお母さんも多く、質問も上の子どもさんの内容のこともあり、お母さん方の熱心さがうかがわれます。

事例２　富士見が丘幼稚園プロジェクト事業

～幼保施設の「協育」の標準化と「未来」の成長～

【報告】1期生：加藤　俊一

子どもの発達に対する社会的環境の悪化・衰退、家庭・学校・地域の教育力低下等を背景に、主に幼児期の情操の育成を目的にして、以下の事業を推進しました。

(1) 幼保施設における「子どもエコ」活動の普及を視野に入れ、「読み聞かせ」とジョイントした「協育」の普及・振興に資するモデル事業の推進。

(2) 県内の幼保施設における「協育」の普及を視野に入れた、そのモデルショップの位置づけとしての事業推進。

１．事業の概要

(1) 期間　　平成23年5月～12月

(2) 場所・対象　富士見が丘幼稚園（大分市横瀬）3歳児～5歳児　計155名とその保護者

(3) プログラム

5月　親子で緑のカーテンづくり〔朝顔：5歳児〕

6月　親子で野菜をつくろう〔トマト：4歳児〕

8月　親子でゆうべのエコフェスタ2011〔5歳児〕

11月　親子でエコなものづくり〔どんぐり工作・竹笛づくり　等：3歳児〕

12月親子でエコなろうそくづくり〔廃油でろうそくづくり：5歳児〕

２．事業の実践

(1) 事業の体制

大分県「協育」アドバイザーネットが主催し、幼稚園関係（園長以下教師および保護者）およびこの事業の基本的な目的である「地域が幼稚園を支援する」ネットワークづくりを目指して、地域関係者（地域自治会、老人会、稙田西中など）の参加を計画しました。

(2) 主なプログラムの実践状況（※第2章 事例7との関連でお読みください）

例：11月実施の「親子でエコなものづくり」

3歳児51人を対象としたこのプログラムは、当初、「静的なものづくり」を計画をしていたが、3歳児に適応する「動的」なプログラムに変更しました。子どもインデアンを前面に出し、枯葉等の自然素材でのインディアン衣装づくり、どんぐりのマラカスづくり・竹笛づくり、そしてインデアンの姿で踊って歌って楽器を鳴らす、3歳児に適応する親子ワークショップ型のプログラムに変更して実践しましたが、すごく躍動する子どもたちを見たり、3歳児の笑顔や親子の会話等を目のあたりにした時、3歳児にマッチするプログラムを実感しました。以下は、実施後の報告書からの抜粋です。

①プログラムの総合点評価

プログラムを大きく変更することにより、これまでのプログラムの中で最高点であったと評価しました。

②園の先生の声

・事前の打ち合わせが不十分だった。

・事前の導入授業で、どんぐりを使って「ととろペンダント」を使ったり、どんぐり独楽で遊んでいたので、自然物にとても興味が持てた。
・様々な葉っぱを見て、「綺麗！」と言う子どもの姿があった。
・家に帰っても、プラトンボ、どんぐり独楽、竹笛で親子ふれあいが出来た声があった。

③地域ボランテイアの参加

地域の参加を手紙で依頼したが、参加は得られなかく、稙田西中の1年生女子生徒が4名参加してくれて、もりりんの着ぐるみを着たり、子どもたちと一緒に活動してくれました。

＜中学生からの手紙＞

・こないだは、おせわになりました。初めての体験だったので、とても緊張しました。でも、いい経験になりました。私は、子どもが大好きなので、皆とてもかわいらしかったです。また来年も行きたいと思いました。もりりんの着ぐるみは、とても暑かったです。でももりりんになってとても良かったです。こないだは、ありがとうございました。

④その他、大分県地球環境対策課のｉ女史、ワークショップ講師のザ・キャビンの声も、充実した実践が出来たとした内容でした。

(3) 事業を終了して

＜成果について・評価（推測）＞

①子どもたちへの成果……○
②協育としての成果……△
主催者側の体制問題、地域の参加
③モデル事業としての成果（今後の拡がり）……○

＜反省と課題＞

①期間が長く、それなりに忍耐強く行動したが、意識の後退が生じたことも事実であった。
②地縁者への呼びかけが、期待できないものとして、積極性に欠けたかもしれない。
③長期間の中で園との関係等、必ず何らかの問題が生じることも想定内とすべき。
④今後、幼稚園・保育園への展開を進めていくとした時、主催者側の体制と強い熱意が必要である。今回のモデル事業は、いろいろな面で反省点が多く、改善したプログラムを企画することへつなげたい。

３．終わりに

5回のプログラムを実践しました。園には約20回訪問し、事業の持続に頑張ってきて、モデル事業としての「トータルは成功」したと考えています。今後、地域ネットワークづくりの作業を当園へ任せることにし、県内の幼保施設への今回のプログラムの普及を進めていきたいと考えています。

＜11月のプログラムの情景＞

どんぐりの独楽まわしに
苦戦している3歳児

どんぐりトトロ

もりりんと一緒

第３節　大分大学高等教育開発センター主催のモデル事業

事例１　「子どもふるさと体験学inくにさき」の試み

近年の青少年の自然体験、生活体験、社会体験、異年齢との交流体験、等々の不足が指摘され、学校や地域社会においての取り組みが推進されています。本事業は、そうした指摘に対応し、子どもたちの活動を推進するためのモデル的なプログラムの開発を目的に、「教育の協働」（以下、「協育」という。）を進める基本的なシステム作りの方策を研究・実践するために、国東地域の様々な機関・団体・グループ等の協働によってプログラムの実施を目指したものです。

１．事業の概要

☆事業のコンセプト

「くにさきの人・自然・文化・産業体験」から自分の地域の魅力を再発見しよう

①子どもの社会規範の成長：「素直で元気！大きな声で挨拶→明るく笑顔で他人に関わる子」

②異年齢交流体験：小・中・高・大学生の異年齢による活動の学びの効果の検証

③「協育」活動のスタンダード化：子ども活動推進型事業のスタンダード

☆主　催　大分大学高等教育開発センター

☆協　力　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット（以下「協育」ネットという）
東国東地域デザイン会議（以下「デザイン会議」という）

☆連携先　県立国東高等学校、安岐町ウォーキング協会、梅園の里、地元企業や農業従事者
地元学識者、国東市教育委員会

☆期　日：平成23年8月9日（火）～11日（木）（2泊3日）

☆宿泊・集合：安岐町「梅園の里」（大分県国東市安岐町富清2244）

☆参加者

児童生徒の参加者	小学生（4年生～6年生）：30名　中学生（1年生～3年生）：6名
高校生ボランティア	県立国東高校JRCメンバー　6名
大学生ボランティア	大分大学学習ボランティアサークル　5名

☆社会人・大学生・高校生の役割

		社会人担当者	大学生	高校生
総括	開・閉講式及び活動全体の管理	中川　忠宣	関　　法子	青山みなみ
生活	事業全体の（朝の集い、生活、全ての活動）指揮・指導	加藤　俊一	松尾　美幸	其田　康児
活動（学習）	各プログラムの運営又は支援、企画・実施	山村　金市	谷村　歩美	松田　宏樹
学習（活動）	班別学習会の指導及び発表会の運営	梅野　悦子	落合美佐紀	戎野可那子
食事（健康）	食事の手配・準備・片付け・マナー等の指導	安達美和子	松尾・川副	花谷　ゆい
健康（食事）	起床・就寝時の健康チェックや救急処置等への対応	安達美和子	川副　蓮実	川部　若葉

☆参加費：宿泊実習費：2泊6食7,000円・傷害保険料200円　計7,200円

☆活動内容と日程

1日目（8月9日）

10：00現地集合（班分け等）

10：00～開講式・グループ編成・活動打ち合わせ・昼食等

13：13～三浦梅園の世界へ（生家・墓・資料館等の見学・説明）

15：30～復興産業「七島い」体験（七島いの歴史・七島い田見学・七島い作品制作）

17：00～夕食・班ごとの学習会・キャンプファイヤー・入浴

22：30　　就寝

2日目（8月10日）

6：00～起床・集い・清掃・朝食・準備

8：30～両子寺・文殊仙寺・岩戸寺・旧仙灯寺徒歩めぐり（文化・野草・野鳥体験）

17：00～入浴・夕食・天文台学習・班ごとの学習会

3日目（8月11日）

6：00～起床・集い・清掃・朝食・準備

8：30～新企業「アキ工作社」見学（段ボールのクラフト工作の見学と制作体験）

10：30～班ごとの体験学習のまとめ会・全体発表会・昼食

13：00～閉講式・解散（13：20）

２．参加者の募集と依頼

(1) 小学生は30人の募集に対して120人近くの応募があり、男女・地域によって抽選し、参加者には自分の地域の人・自然・文化・産業に関するレポートを持参するよう通知しました。

(2) 班長となる中学生は、最初から協力が出来るように、「協育」ネット会員のPTAと連携して参加費の補助等をいただき、1つの中学校から選考しました。

(3) リーダーとなる高校生は、地元の高校のJRCの活動と連携し、主催者が必要経費を負担する形で参加体制ができました。

(4) アドバイザーとなる大学生は、大分大学学習ボランティア「フォーバル」のメンバーへ依頼し、実費のみ主催者が負担し、ボランティアとして参加しました。

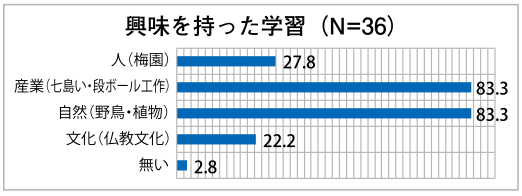
３．指導者の依頼

(1) 主催者（大分大学高等教育開発センター）と連携関係にある「協育」ネットと、これまで協働で実践交流事業を行ってきた地元のデザイン会議の３者で企画・運営をするシステムとしました。

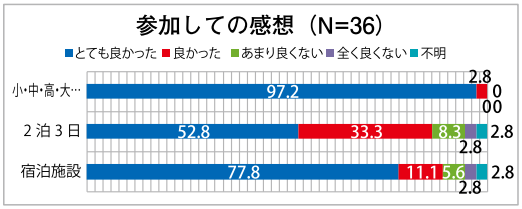
(2) 地元の支援者はデザイン会議が依頼し、ボランティアとして（若干の謝金）参加要請をしました。

４．事業の成果

(1) 参加者への成果



左の図から、子どのたちが興味関心を持ったのは、体感できる活動であることが分かりました。人や文化などは理解しにくく、何を学び、何が楽しいかがわかりにくいために、短期間で行う活動ではこのプログラムはふさわしくないことも分かりました。



左の図からは、子どもたちの満足度がわかります。まず、小学生・中学生に加えて、そのリーダーとしての高校生と大学生の参加が非常に有効であることが分かります。また、宿泊学習タイプの本事業では、きちんとした施設で行う事が求められていることも分かりました。

(2)「協育の協働」推進モデル事業としての成果

①参加者・経費について

今回の事業の幅広い異年齢という学びのプログラムが成功したと考えます。地域指導者や高校生・大学生等の指導者は基本的にはボランティアでした。経費については2泊7,200円（宿泊代と傷害保険料）の参加費で120人ほどの応募がありました。今後、移動経費やボランティアへの謝金等を参加費に計上するか、どれくらいの参加費が妥当なのかも検討する必要があります。

②関係者のネットワークについて

効果のある事業は単一組織では出来ないことが確認できました。今回のようなイベント的事業では活動プログラムに関するノウハウを持った様々なスタッフの参画が不可欠です。そのための日常的なネットワーク、相互支援・協力による活動を行っていくことによって、参加者が満足できる活動を仕組むことが出来るのではないだろうかと考えています。更に、小・中・高・大学生が揃うことの有効性も明らかになりました。

事例２　大分大学生のキャリア教育支援の取り組み

平成23年度に経済産業省が実施した「産学協働教育を通じた中小企業の魅力発信事業」を、九州では熊本、佐賀、福岡及び大分大学高等教育開発センター（以下「本センター」）の4地域で実施することとなりました。そこで、本センターでは生涯学習の観点から、地域の企業等との連携を密にして、自主講座として開講することとしました。目的を、学生の進路選択等の視野を拡大し、自分自身の将来についてキャリアをデザインしていくための学びの機会を提供することとし、これまでに学生の視野に入っていないであろう中小企業の魅力を発見することを目指すプログラムを実施することとしました。

実施に当たっては、「中小企業の魅力大発見プロジェクト事業」として、それぞれのノウハウをつ四者が協力して行う「協育」という仕組みで実施することとしました。

１．事業の概要

(1) 事業の目標

①講習と取材活動を通して社会人基礎力の向上を目指す。

②学生自身が、自分の将来像を職業と関連づけて描くことを目指す。

③関係者同士の恒常的な交流のネットワーク化を目指す。

(2) 事業期間　平成23年6月～平成23年12月31日

(3) 事業内容

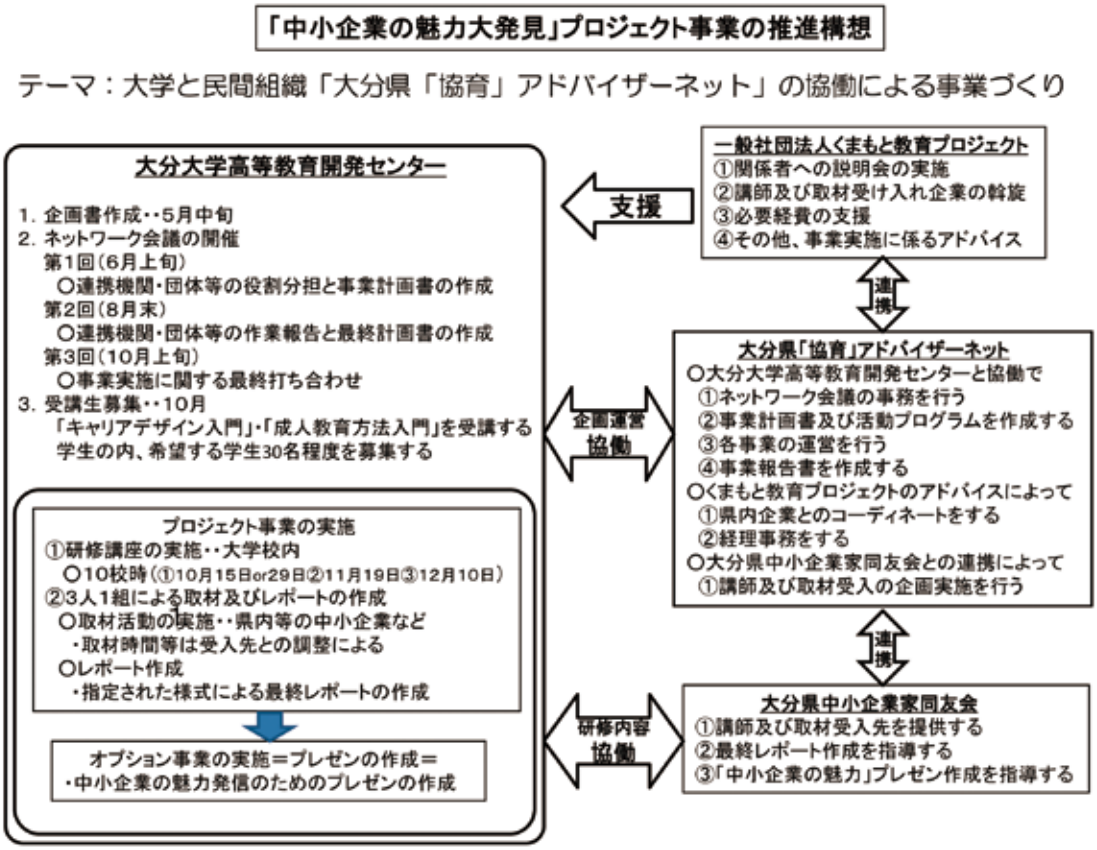
①講義形式の講習　90分×10回

②３人１組での取材活動とレポート作成

③オリエンテーション科目とフォローアップ科目

④オプション事業＝プレゼンの作成＝

２．事業実施体制（連携先）と参加者



＜受講者数＞

講義1	講義2	講義3	取材活動
8	18	18	8

３．講習プログラム

実施体制と役割に従って業務を分担して行い、講師及び取材先は一部を協育アドバイザーネットに依頼しましたが、ほとんどは大分県中小企業家同友会において選定していただきましたた。

(1) 講義

講義1：企業とは！。そして中小企業の可能性！（10月15日）

講　　義①　人間にとっての「職場」とは何か＝企業が求める人材＝

講　　義②　中小企業の魅力を生かした海外への進出

講　　義③　企業内の人間関係＝雇用者と従業者の関係＝

講義・演習④　中小企業の魅力を探る＝企業現場を訪ねてみよう＝

講義2：企業の地域貢献（11月19日）

講　　義⑤　魅力ある地場産業の展開＝地域と繋がる＝

講　　義⑥　地域の教育資源としての企業の役割

講　　義⑦　企業としての幼稚園、教育機関としての幼稚園＝地域の子どもを育てるために＝

講　　義⑧　企業のCSR活動（企業の社会的責任）＝学校教育の職場体験活動の支援の取り組み＝

講義3：現代社会の経済活動における中小企業の役割と今後の展望（12月10日)

講　　義⑨　企業が追うものは何か

シ　ン　ポ⑩　中小企業の経営上の課題と今後の展望

(2) 取材活動

１班　（株）翼：旅館・飲食等のサービス業（学生２名）

２班　（株）地域科学研究所：地域ブランド構築、地域経営コンサルティング（学生３名）

３班　（有）上田椎茸専門店：椎茸製品の製造販売業（学生３名）

４．まとめ

(1) 学生の感想から

国立系の大学においては、学生は中小企業へ目が向いていないことがよく分かりました。しかし、本講座を受講した学生の多くは「目から鱗」「新しい発見」という感想を持ったことは事実です。

【受講生の感想】今回「中小企業の魅力大発見」プロジェクトの各講義を受講したり、企業への取材を行って、初めて中小企業とはどういう企業なのかを入り口だけではあるが知った。私たちが教育系学部に所属していることもあり、企業はどういうものであるのかを知る機会は自分で得ない限り無い。企業といえば、テレビコマーシャルなどを放送している、いわゆる大企業か、地元の有名な企業ぐらいしか知らなかった。今回のプロジェクトだけでも魅力的な中小企業がいくつもあったので、日本には数え切れないぐらいの魅力あふれる中小企業があるに違いない。 企業にはぜひ自社のアピールを今まで以上に取り組んでいただけると、学生が中小企業に目を 向けるきっかけとなるはずだ。たとえば、大学と連携して講義を行ったり、複数の企業が合同で PRのためのCMやパンフレットを作ったり、大学祭に出店したりすることが考えられる。就職活動中の学生以外にもPRし、より多くの学生に中小企業について知る機会をつくってもらえることを希望する。

(2)「協育」という視点から

四者がそれぞれの役割をきちんと担うことにより、本事業が成果をあげることができたと考えます。特に、教育系の本センターが繋がりが少ない企業の積極的な支援、運営における「協育」アドバイザーネットの学生への関わり等､協働の重要性とそのシステムに関するモデル事業となったと考えられます。

事例３　第１回「協育」見本市の開催

「学習」と「教育」又は「需要」と「供給」をどうマッチングするかが「教育の協働」の施策の中核です。そこでマッチングの場として双方が集い、地域教育資源と学習ニーズのマッチングを行う「協育見本市」を開催することとしました。その場で、子どもたちが学校教育や社会教育において、これまで無かった学びを広げていくために、県内の様々な団体・グループ、企業などの教育資源に参加を呼びかけるとともに、参加者のこれからの活動のためのネットワーク化を進めていくこととしました。

また、大分県教育委員会が開催する「おおいた学びの輪」推進事業における講座受講者や県内のNPO法人、民間教育事業者、社会教育関係団体等に日頃の活動の様子や作品・成果の発表、交流の機会等を提供する「おおいた学びフェスタ」と連携して、同会場で開催しました。

……「協育」見本市の概要……

１．日　　時　平成24年2月18日（土）　10：00 ～ 15：30
２．会　　場　別府市労働者福祉センター（大分県社会教育総合センター）
３．主　　催　大分大学高等教育開発センター
４．共　　催　NPO法人 大分県「協育」アドバイザーネット・大分県「協育」ネットワーク協議会
５．協　　力　別府市地域婦人連絡協議会、別府市立別府商業高校、その他別府市内の各種団体
６．コンセプト
①展示・紹介や交流・活動の場を通して、教育の協働に関する取り組みを紹介しする。
②各団体が交流することで、団体間の活動内容・事業内容の学びあい、ネットワーク化を図る。
７．事業
（1）記念シンポジウム（11：00 ～ 12：20）参加者：約120名
テーマ：「あなたの力が子どもたちを、地域を輝かせる！」
［シンポジスト］
○別府市教育委員会　参事　溝部　敏郎　氏
別府市は、平成23年度から地域住民の学校支援活動と放課後の子どもたちの安全・安心と体験活動事業のこれまでの実績を基にして、市内全域で一体的に実施するために、街部の公立公民館にコーディネーターを独自で配置する等の先進的な取り組みについての報告でした。
○飯塚市立高田小学校　校長　城谷　登志江　氏
飯塚市内全ての小学校で実施されている地域住民（高齢者）の「マナビ塾」との関わりを持ちながら、平成21年度から本格的なコミュニティースクールとしての教育活動を行い、基礎学力の向上等に大きな成果を上げている取り組みの報告でした。
○（東京都）キャリア教育コーディネーター　香月　よう子　氏
アナウンサーという職業の一方で、「きてきて先生プロジェクト」の活動をきっかけに、杉並区の教育コーディネーター、東京都のプラットフォーム事業などに関わっており、実際の教育コーディネーターの活動や学校支援本部を立ち上げた経験から、様々な立場の人たちが協働していく際の注意点を、多様な視点からうかがいました。
［コーディネーター］
○大分大学高等教育開発センター教授　　中川　忠宣
《 ～ LIVEでネット配信》
※記念シンポジウムを同時に、自宅で！　公民館で！　自由にご覧いただけるよう配信し、23のアクセスが確認されました。今後、大分大学高等教育開発センターのホームページ等にもシンポジウムの様子を配信することにしています。（http://www.he.oita-u.ac.jp）

(2) 協育コーナー（28事業の実施）

◎学びのコーナー

・高校生就職面接模擬体験・コーディネーター相談会・ブックトークと読み聞かせの部屋

・iPhone＆iPadワークショップ

◎活動紹介コーナー

・「エコキャップ」キャンペーン・浜脇子ども太鼓演奏・私たちの野外活動紹介パネル展

・自然体験活動紹介パネル展&「トキなりきり体験」・農泊体験紹介パネル展

・キワニスドール活動の紹介・トリニータ2012の新情報

◎体験・交流コーナー

・ふれあい囲碁ゲーム・タブレット端末体験等・手作りビーチアニマルと遊ぼう

・おもちゃの部屋・楽しくゲーム（フリスビーで遊ぼう/ストラックマートゲーム）

・エコクイズ・自転車発電機・地球温暖化を学ぼう・七島いでコースターづくり

・活き2ものづくり教室・お手玉づくり/遊び・手作りオリジナル凧づくり

◎総合楽習コーナー

・ふいごプロジェクト事業（東日本大震災義捐金）・「協育」フォトギャラリー

・交流餅つき大会＆ぜんざいづくり・楽しく「スタンプラリー」・閉会イベント（抽選会・餅まき）

８．出店協力者

(1) 出店・参加団体（21団体）

㈱地域科学研究所／パークプレイス／ NPO法人エー・ビー・シー野外教育センター／九重ふるさと自然学校／国東市くにみグリーンツーリズム／浜脇子ども太鼓/大分キワニスクラブ／㈱大分フットボールクラブ／ NPO法人ふれあい囲碁ネットワーク大分／大分市川添公民館運営協議会／大分市川添技能保存会／東国東地域デザイン会議／ NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット／地球温暖化防止活動推進センター（津久見美化環境グループ）／フレスポネット／大分大学活き活きプロジェクト／杵築市環境ネットワーク／ NPO法人BEPPU PROJECT ／東国東地域デザイン会議／大分大学高等教育開発センター／中小企業家同友会

(2) 楽しく「スタンプラリー」への協力

イベントへの参加を奨励するためのスタンプラリーについては、「協育」見本市関係では、九州電力、イオンパークプレイス、㈱翼など、多くの方に景品を提供していただきました。

上：ボランティアスタッフ

上：浜脇子ども太鼓

初めての試みにも関わらず、多くの賛同者を得て開催することができました。県立社会教育総合センター事業の「おおいた学びフェスタ」との同日・同会場での開催は、県民からすれば、様々な体験を一度に出来るという大きなメリットがあったようです。関係者の方々に感謝・感謝です。

しかし、「協育」見本市が目指すものについては、ぼやけたところが見えてきました。「何を提供し、何と何を繋ぎ、今後にどう生かしていくのか！」というところを更に検討していく必要があります。本見本市は、プロモーションビデオ等で配信しますのでご意見等をお寄せいただきますようお願いします。

第３章　地域「協育」推進の取り組み

第１節　大分県が進める「協育」ネットワークの取り組み

大分県教育委員会では､子どもを取り巻く様々な問題が指摘される中､教育の担い手である学校､家庭、地域社会がそれぞれの役割を果たすとともに、三者が連携・協働して子どもの育成に取り組む「協育」ネットワークの構築に、市町村教育委員会と連携して取り組んでいます。

１．これまでの取り組みについて

(1) 国の動き

①教育基本法の改正（平成18年12月）

第13条「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」

②社会教育法の改正（平成20年 6 月）

第 3 条（国及び地方公共団体の任務）

「社会教育が学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力の促進に資することとなるよう努めること」

(2) 県の動き

①平成17年 3 月　　「おおいた教育の日条例」の制定

②平成17年度～ 19年度　平成17年度～ 19年度　地域協育振興モデル事業

③平成18年11月13日　　大分県社会教育委員会議答申

「地域社会の協働による子どもの健全育成の方策について」

④平成19年 2 月　　「大分県地域協育振興プラン」の策定

「協育」ネットワークの構築

※学校・家庭・地域の三者が自らの役割と責任を果たしつつ、協働して子どもたちを育成していくこと

⑤平成20年 3 月14日　　大分県社会教育委員会議建議

「教育の協働を推進する拠点としての役割を果たすための公民館運営の在り方」

⑥平成22年 9 月 1 日　　大分県社会教育委員会議答申

「子どもの『生きる力』をはぐくむ学校教育と社会教育の協働の在り方について」

(3)「協育」ネットワークを構築するための主な事業

①学校支援地域本部事業（平成20年度～ 22年度）

・コーディネーターが学校の求めに応じて、学習支援や登下校時の安全指導、部活動支援等に地域人材を派遣

②放課後子どもプラン推進事業（平成19年度～ 22年度）

・放課後等に小学校等を活用して、地域住民との交流・体験活動等を実施

③学びの教室推進事業（平成21年度～ 22年度）

・放課後等に小学校等を活用して、地域住民による国語、算数(数学)、英語の学習支援を実施

事業名	区　　分	20年度	21年度	22年度
学校支援地域本部	活　動　数	3,875	8,120	9,201
	支援者数（延）	28,782	60,136	61,266
放課後子ども教室	参加児童生徒数	3,833	3,442	4,273
	支　援　者　数	2,124	1,967	1,985
学　び　の　教　室	参加児童生徒数	－	631	1,590
	支　援　者　数	－	66	342

２．平成23年度の取り組み等について

(1) 地域「協育力」向上支援事業の取り組み状況

①学校支援活動の実施　　11市町村57本部、
　　支援対象校：中学校62、小学校150、幼稚園等37

②放課後子ども教室の実施　←＜連携＞→　放課後児童クラブ
　17市町村151教室　　16市町村182クラブ

③学びの教室の実施　　12市町村71教室

(2)「協育」ネットワークの構築状況

＜状況調査の実施＞

「協育」ネットワークの基本的な枠組を示し、市町村教育委員会に調査を実施

＜「協育」ネットワークの基本的な枠組＞

①公民館等を中心に学校、家庭、地域の教育の協働に係る関係者による会議等を組織していること。
②学校、家庭、地域の教育の協働をコーディネートする人材が配置されていること。
③中学校区程度の一定地域を範囲としているネットワークであること。
④学校支援活動、体験活動の機会提供、安全・安心な地域づくり等の具体的な教育の協働による活動を継続的に行っていること。

＜状況調査の結果＞

115の「協育」ネットワーク（平成23年9月1日現在）

▲市町村によって取組及び活動内容に差
（ネットワークの核となる人材の確保、地域人材の養成と確保）

(3) 地域との連携を推進する担当教職員の配置状況

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
公立小学校	38%	68%	87%	93%	95%	97%
公立中学校	36%	62%	87%	92%	94%	96%

３．今後の方針等について

地域「協育力」向上支援事業の取組拡大を図るとともに、学校・家庭・地域が連携・協力して子どもたちをはぐくむ「協育」ネットワークの構築を全県的に推進

＜今後さらに期待されること＞

・学校教育活動や地域での学習・体験活動等への支援を拡大
・福祉保健施策等と連携した家庭教育支援の充実　等

地域の様々な課題や要望に対して、柔軟に迅速に対応できる「協育」ネットワーク

第２節　地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会

～子どもが元気！地域が元気！な「協育」の実践事例を通して～

１．趣旨

平成19年度に第1回交流会を開催しました。行財政改革の中で、平成の大合併が一応終結し、合併による地域の活性化の取り組みには様々な課題が浮き彫りになりました。そうした中で、地域づくりは「官から民へ」の時代となったことや、平成18年12月に改正された教育基本法を見たとき、毎年、福岡県立社会教育センター（篠栗）で開催されてきた「生涯教育実践研究交流会」を大分県流に開催することを決意し、県教育委員会と、開催地の組織「東国東地域デザイン会議」で協議し、2年間の検討の末に開催が実現しました。

「民」という立場でアイディアを発揮し、ネットワークを築き、素晴らしい「デザイン」を描きながら取り組んでいる県内の個人・団体・グループの活動情報を共有し、新たに「我がまちづくり」に生かしていくエネルギーを高めていくためのもので、第1回から、三浦清一郎先生をはじめ、生涯教育実践研究交流会の方々にご指導いただきながら、平成24年2月には第5回を開催することが出来ました。

青少年を取り巻く様々な課題や団塊世代・高齢者の地域参加の促進等が指摘されているところで、学校や家庭、地域における様々な取り組みの連携・協力の必要性が言われています。こうした現状の中で、県内各地で各種団体等の独自の取り組み、地域が学校と連携した取り組みなどが行われています。本交流会は、こうした県内各地の実践者が自主的に集い、実践事例を交流することによって大人自身の活動エネルギーを蓄える交流会であり、その趣旨に賛同していただく様々な団体が増えて共催で開催し、さらに、地元教育委員会・地域の団体等と協力して開催してきました。

「地 域 発」：県内18市町村のいろんな地域から活動情報を発信する交流会とする。
「活　　力」：参加者が活力を貰う交流会とする。
「発　　展」：「次世代を担う子どもたちの育成による地域の発展」をテーマとする。
「安　　心」：テーマ実現により、子どもや高齢者の安全・安心、地域産業等の発展による安心な地域づくり等を目指した交流会とする。
「デザイン」：新しい発想、地域の個性・独自性等がデザインされた交流会とする。
「実　　践」：実践していることの交流会とする。

２．組織

「地域発『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」運営委員会組織で開催しています。

〇主催　　東国東地域デザイン会議　大分大学高等教育開発センター
〇共催　　大分県生涯教育学会　　NPO法人幼老共生まちづくり支援協会
　　NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット
〇協力　　大分県「協育」ネットワーク協議会　その他

３．テーマ

1回～3回　「次世代を担う子ども達のために地域の大人が汗をかこう！」
4回～　　「大いに語ろう～子ども育ての秘訣、我がまちの人づくりの夢を！」

４．交流した事例（氏名の敬称は省略）

(1) 基調提案（第3回～）

3回　学校支援をとおした「協育」ネットワークづくり　大分県教育庁社会教育課社教主事 矢野　修

4回　コミュニティ・スクール高田～学校が元気　地域が元気,地域とともに創る高田小「合」校～
提案：福岡県飯塚市立高田小学校校長　城谷登志江
4回　読書の魅力に触れる～読み聞かせとペープサート～
提案：大分県「協育」アドバイザーネットの皆さん
5回　地域と共に育ち、輝く高校生　～県立国東高校JRC活動から～
提案：大分県立国東高等学校教諭　浅野　昌子

(2) 基調講演・特別報告

1回「今、大分県が抱える青少年教育課題」
大分県教育庁生涯学習課社会教育鑑　中川　忠宣
2回「地域からの学校への支援の意義と方策」
～子ども・教職員・地域住民の意識調査から～
大分大学高等教育開発センター教授　中川　忠宣
3回「地域社会が育む教育的価値」
東国東地域デザイン会議会長　林　浩昭
5回「教育の協働」の動向～大分県『協育』ネットワーク協議会」の設立～
大分大学高等教育開発センター教授　中川　忠宣

(3) 特別講演

1回「学校、家庭、地域住民等の相互の連携協力」生涯学習・社会システム研究者　三浦清一郎氏
2回「少子高齢化に対応した地域社会システムの構築方策」
～地域住民がやれることは何か～　九州共立大学生涯学習研究センター教授　古市　勝也
3回「『生涯現役論』の混迷」　生涯学習・社会システム研究者　三浦清一郎氏
「学校開放事業」～「マナビ塾」の思想と実践～　福岡県飯塚市教育委員会教育長　森本　精造
4回「主体性」と「学習」を優先した現代教育の忘れもの
～教育における「不作為」と鍛錬の空白～
生涯学習・社会システム研究者　三浦清一郎氏
5回「無縁社会の発生源と『協働』の方法」
生涯学習・社会システム研究者　三浦清一郎氏

(4) 実践事例

★１回実践事例

「弥生のムラからの発信」　国東市歴史学習体験館：有馬　孝
「グリーンツーリズム活動」　（国東市）くにみグリーンツーリズム研究会：田中　友昭
「学校開放した学社・社福連携ネットワーク事業」
（杵築市）NPO法人子どもサポート「にっこ・にこ」帯刀　里美　安部　博美
「あきツーリズム研究会の活動目的と取り組み」　（国東市）あきツーリズム研究会：冨永　六男
「総合型地域スポーツクラブと街づくり」　（国東市）NPO法人923みんなんクラブ：丸山　順道
「活力ある地域社会をめざして～総合型地域スポーツクラブ～」
（大分市）川添なのはなクラブ発表：原　聖一郎
「ふれあいキャンプ（不登校小中学生のキャンプ）」　県立香々地青少年の家：岩切　義和
「16年間を振り返って～読み聞かせ活動～」
（国東市）読み聞かせグループ「ひまわり」：荘司　壽子　萱島　悦子
「まずは、自分（おとな）たちでしょ」　国東市立安岐小学校PTA：矢野三四郎

「別府市地域協育プロジェクト会議が実施する学校支援活動」
別府市教育庁生涯学習課：武田　謙治
「地域の力を活用して（放課後子ども教室）」　由布市挾間公民館：黒田　美保
「サイキッズのためにできること」～協働した子育て支援～
佐伯市教育庁生涯学習課：飛弾千鶴代

★２回実践事例

「地域自然愛護団体「九重の自然を守る会」との連携　大分県立九重青少年の家：一瀬修一郎
「子ども達の活動支援ネットワークを作る」～番匠川流域ネットワークは子ども達の
野外活動を支援します～　（佐伯市）番匠川流域ネットワーク：平野　憲司
「子どもたちの健やかな成長を願って進める公民館の活動」
（中津市）下郷地区公民館：矢野すみ子
「子どもたちのために大人が汗をかこう」～地域住民のネットワークによる
子どもの安岐川探検体験活動～　（国東市）明日を見つめる'あき21：是松　章三
「地域、諸団体と連携した体験学習」～「体験合宿in大南」の実践～
大分市大南公民館：工藤　真久
「子ども歌舞伎と保護者・家庭・地域との関わり」（国東市）国見田舎歌舞伎保存会：信原　英治
「地域子ども事業でみんなが育つ」　佐伯市弥生振興局地域振興・教育課：高次　秀爾
「向野地区公民館事業の取り組みについて」～公民館と小学校との連携～
（杵築市）山香町向野地区公民館：豊田　潔　都甲　秀幸
「蒲江小学校における『協育』の実践」　佐伯市立蒲江小学校：伊東　俊昭
「清川の子どもに、清川の大人ができること」
豊後大野市清川地区学校支援地域本部：佐藤　君代　藤原　勇
「おやじが変わった！学校が変わった！」～今、できること～
（由布市）ゆふいん父ちゃん会：八川　徹　山崎　充
「武蔵町における参画・協働の人権教育」 国東市教育委員会武蔵分室：村井奈穂子　平野　正義

★３回実践事例

「九重ふるさと自然学校とは」　（九重町）九重ふるさと自然学校：鰐川　雄太
「山っこクラブ」～社会教育担当1年生が向き合う青少年事業～
佐伯市本匠振興局地域振興・教育課：河原　尚志
「ホタルを通して子どもたちの育成を！」　（国東市）武蔵町ホタルを育てる会：都留俊一郎
「学習ボランティア」の紹介～夏の海体感講座への関わり～
（大分市）大分大学学習ボランティア：日野美由紀　小田邊知世
「NPO法人芸術家と子どもたち、子どもとアーティストの出会い」
（別府市）NPO法人　BEPPU PROJECT：坂本　倫子　安達美和子
「復活プロジェクトの活動」
（国東市）三浦梅園学びの道復活プロジェクト実行委員会：浜田　晃
「子どもが豊かに育ち、地域も元気になる地域協育」
（由布市）挾間中学校区地域協育ネットワーク会議：梅野　悦子
「諭吉の里発「協育」ノススメ」　中津市地域協育振興プラン実行委員会：山本　健吾
「環境を守る教育で育つ　富士見っ子！」　（大分市）富士見が丘幼稚園：渕野二三世

★４回実践事例

「楽しく学ぶ『サタデー・スタディー』」～大分大学付属中学校での英語・数学の学習支援活動～
（大分市）大分大学学習ボランティア「フォーバル」：川口亜由美　関　法子
「由布市生活体験スクールにおける地域人材の活用について」 由布市中央公民館：長谷川美由紀
「自然体験活動には子ども育ての秘訣がいっぱい！」
県立社会教育総合センター香々地青少年の家：須股恵美子
「心豊かな人づくりの創造と活力ある今津校区を目指して」　中津市今津公民館：錦　利幸
「高瀬地区の地域活動について」～連帯感醸への考察～　大分県生涯教育学会：安心院光義
「若いママの交流（子育て支援）」～子育てサロンと読み聞かせ～
（大分市）子育てサロンぽっぽたきお：山上　伸子
「自分づくり・地域づくり・子どもづくり」　（大分市）明治楽友会：加藤　俊一
「大分大学米水津塾」～海辺のむらに大学～ 佐伯市米水津振興局地域振興・教育課　渡辺　公広
「観光ほど素敵な仕事はない」　（杵築市）元杵築市観光協会：黒田幸一郎
「国東の活性化を考える」　（国東市）国東活性化委員会：今富　正幸

★５回実践事例

「学校と地域の教育力を繋ぐPTA活動の事例」　別府市立朝日中学校PTA：山本　美咲
「地域連携を軸にした学校経営『安岐小プラン2011』」　国東市立安岐小学校：岡松　寛
「くにさっき子の居場所作り」　（国東市）国東地区コーディネーター：萱島　かよ
「直入放課後子ども教室の実践報告」 竹田市直入放課後子ども教室
峯野希美（プロデューサー）・大塚　千鶴・森田　恵子・吉野　聖子（指導者等）
「父親のつながりづくりについて」～おおいたパパくらぶの取り組み～
（大分市）鴛野小おやじ倶楽部：大西　正久
「子どもに体験という学びの場を！」　（広島市）ビッグ・フィールド大野隊：谷村　歩美
「運動の苦手な子集まれ」　（国東市）菜の花スポーツ塾：有次　昭二
「みんなで遊べばだれもが仲良し」（大分市）NPO法人ふれあい囲碁ネットワーク：谷川真由美
「親子で集う公民館」　佐伯市宇目振興局：戸高　直人
「公民館活動における『協育』』の取り組み」　（大分市）川添校区公民館：赤峰　友子

(5) 夜の交流会

人的ネットワークづくりを目的に毎年開催される「夜の交流会」ですが、第5回交流会では50人ほどが参加し、新しいネットワークをつくることができました。

5．成果と課題

県内には活力あふれる事例がたくさんあることと、手弁当でも持ち寄っていただける多くの方々がいることが少しずつわかってきました。当初は、事例を探し、手弁当で発表をお願いすることが一番の課題（今でも同じ）でしたが、徐々にそれから開放されつつあります。それは、日常的にそうした組織・団体と気軽に繋がることができるようになったからです。3年目になる「協育」アドバイザー養成講座の修了生による「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」の方々とのつながり、平成23年12月に設立した「大分県『協育』ネットワーク協議会」の活動と連携するシステムが徐々にできつつあるからです。県内で日常的・継続的な活動をしている団体・グループ、企業としての地域貢献活動等とのつながりは、「1＋1を3にすることができる」ということが立証されたと思います。そして、参加者からは「事例をとおしてやる気をもらった」という感謝のことばをたくさんいただきます。まさに、事例ほど素晴らしい刺激はなく、そのことを地域へ持って帰って、自分たちの活動を「発展」させ、将来的な「安心」な地域づくり活動につながっていただければ……と願っています。

しかし、他の課題もあります。「交通の便利が悪くて参加しにくい！」「年度末は他の行事と重なって……」という声や、「学校関係者がほとんど参加しないのはどうして？」等々……。特に、学校関係者やコーディネーターの方々をはじめ、教育行政等の実践とどうタイアップしていくかが今後の方向性と考えています。

第２回交流会の時の「梅園の里」のしだれ桜

第３節　大分大学高等教育開発センターの取り組み

１．NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの設立

～「協育」アドバイザー養成講座を通して～

子どもたちをめぐる様々な課題への対応、将来の地域を担う子どもの育成への期待を受けて、平成18年12月の改正教育基本法の第13条において、これまで言われて続けた「教育の協働」を法律で定めたということの意義は大きいものである考えています。国は改正教育基本法を受けて、平成20年度から「学校支援地域本部事業」を実施し、その中核となる「コーディネーターの配置」を推進してきました。大分県においても、それ以前の平成17年度から県単独事業として、コーディネーターの配置を中核としたモデル的な事業（「地域協育振興モデル事業」）を県内4市で実施していました。こうした事業が「施策」として徐々に定着しつつある中、大分大学高等教育開発センター（以下「本センター」という。）が平成21年度から実施した、地域の指導的立場の方々や実践者を対象に、より高度なコーディネート力（アドバイザーとしての力量）を養成するための研修事業と、その修了者のネットワーク化への歩みを紹介します。

１．『協育』アドバイザー養成講座について

これからの教育において、「青少年を育成する学校教育、社会教育、家庭教育の連携」、「高齢者の生きがいを創出するための活動の連携」等々、地域全体が連携協力して、縦割りの取り組みから、「横の接続」を促進する取り組みの重要性が認識されてきました。そこで、こうした取り組みを繋いでいく民間のコーディネーター（アドバイザー）の養成・組織化により、地域での日常的な活動を相互支援するとともに、活動情報の収集、プログラムの開発等を行いつつ、本県における「家庭、学校、地域社会の教育の協働」システムの構築に寄与することをめざして平成21年度から養成講座を開講しました。

(1) 内容

①＝基礎編＝「協育」アドバイザー基礎研修（1日）

〇各種事例を通して教育の協働を推進する中核的な人材（コーディネーター）の必要性を理解すると共に、コーディネーターに必要な能力について学びます。

②＝中級編＝「協育」アドバイザー専門研修（2日連続）

〇家庭、学校、地域社会の現状を学び、コーディネート能力の養成のための、体験活動に関すプログラム企画力を養成し、提案し、実践するためのスキルの向上を図ります。

③＝上級編＝「協育」アドバイザー実践研修（１泊２日）：協育の協働に関する先進地研修

〇「教育の協働」の先進地を視察し、地域づくりや青少年の健全育成に関する中心的指導者・コーディネーターとしての実践的な能力を向上させます。

(2) 2期生を対象とした各講座の概要（受講者：28名）

ここでは、例として２２期生の各講座について報告します。

①「協育」アドバイザー基礎研修の内容（受講者：27名）

研修1：子どもの生き方の学びについての基礎知識

研修2：地域における子どもの生き方の学びの支援の実践

研修3：キャリア教育コーディネーターの機能と役割

研修4：学校と地域・企業等とのネットワーク構築方法

【参加者の内訳】

各種コーディネーター	自治会関係者	地域活動関係者	行政関係者	教職員	団体関係者	その他
2	1	14	1	6	2	2

②（中級編）「協育」アドバイザー専門研修の内容（受講者：25名）

研修1　家庭教育の現状・課題と教育の協働の視点
研修2　地域社会の現状・課題と教育の協働の視点
研修3　学校教育の現状・課題と教育の協働の視点
研修4　「協育」を推進するコーディネーターの実際
研修5　身近なエリアの人との「子どものためのプログラム」作成
研修6　「協育」アドバイザーとしての基礎的スキルの学び

③（上級編）「協育」アドバイザー実践研修（受講者：8名）

○財団法人山口県ひとづくり財団　県民学習部「生涯学習推進センター」
・山口県民の学びを支援すると共に、「人づくり・地域づくりフォーラム」を開催し地域活動リーダーの育成を行う等、県民の生涯学習・社会教育活動の推進状況について学びました。

○山口市鋳銭司小学校（山口県山口市大字鋳銭司）
・平成21年度から先導的に取り組み始めた、地域住民が学校教育にどうか関わり、支援してくかというコミュニティースクールの取り組みについて学びました。

２．ＮＰＯ法人大分県「協育」アドバイザーネットの設立

養成講座の修了生による組織化については、その目的、活動内容等を検討しつつ、「大分県『協育』アドバイザーネット」という名称で立ち上がりました。その後、市民・企業・団体・教育機関など一層協力しながら『協育』を推進するためには、県民の方々や各種組織等から認知されることの大切さを感じ、今後、県内各地で取り組まれている様々な『協育』実践を交流し合い・重ね合い・深めい・広め合うためにNPO法人化をめざし、平成23年12月7日に設立されました。更に、全県的なットワークづくりをめざし、平成23年12月18日に設立された「大分県『協育』ネットワーク協議会」の事務局として、新しい公共の担い手づくり、新しいパートナーづくり、新しいアドバイザーづくりをめざして活動を行うこととしています。

(1) 会員数（H24.3月末現在）（正会員・特別会員・賛助会員）

第一期生	第二期生	第三期生	総会員数
15名	15名	26名	56名

(2) 事業内容

①人材育成事業
・学習ボランティアや「協育」アドバイザーの育成、「協育」コーディネーターの交流とともに会員の積極的な研修活動への参加を進めます。

②普及・実践事業
・「教育の協働」を推進するためのモデル的な事業や、青少年の課題に対応して「協育」という視点からのプロジェク的事業・プログラム開発事業を行います。

③研究・啓発事業
・「教育の協働」の推進に関する調査や資料等の作成、活動に関するPR活動を行います。

３．今後の方向性

各地域で「協育」の柱となるコーディネーターとして活躍する方々と協働で活動するために、アドバイスできる力量を養成することと、活動のシステムづくりを進めることの重要性を認識しつつも、その活動をするための壁に向かって悩みを抱えています。本来「協育」アドバイザーネットが目指すものは、「仲間とのネットワーク化による自らの活動の充実」と「モデル的実践をとおしたアドバイスや各種情報を提供する」ことです。このことを進めるうえでの「NPOとしての役割」をきちんと認識した活動を組み立てなければなりません。この取り組みが始まったばかりであることや、会員の思いの違い、地域からの要請の不透明さ等々の課題を整理し、地域の様々な組織のネットワーク化の中核として活動することを期待していただきたいと思います。

２．大分県『協育』ネットワーク協議会の設立

１．設立の経緯と趣旨

近年の子どもたちに関する様々な課題は、「対処療法的取り組み」では解決しない多くの複雑な要素が絡み合っていることが指摘されています。しかし、家庭や地域社会での教育機能の低下、学校教育活動の肥大化など、これまでのように、三者がバランスを取りながら、それぞれの教育機能を果たすことが困難になっています。こうした現状を踏まえて、平成18年に改正された教育基本法の第13条に、「それぞれの教育機能の発揮と連携・協力」の項が新設されたことから、地域社会における「教育の協働システム」を構築することが喫緊の課題であり、そうした関係者のネットワーク化が急務とされています。さらに、家庭や地域での子育てを支援する活動や、高齢者が子どもと関わりながら「生涯現役」を創りだす活動など、地域社会総参加での子育てのまちづくりが求められています。

本県においては、学校はもとより、各種機関、団体・グループ、企業等において、こうした現実を踏まえながら、様々な取り組みをとおした地域づくりが進められています。

そうした中、平成18年度に大分県教育委員会が策定した「地域『協育』振興プラン」において「教育の協働」（以下、「協育」という。）による効果的な教育活動を日常的に実践する重要性とその方策が示され、「学校支援地域本部事業」などを実施することをとおして、地域住民のネットワーク化や高齢者の生き甲斐づくり等の取り組みが進められてきました。

一方、大分大学高等教育開発センターにおいては、平成21年度から「教育の協働」のキーマンとなるコーディネーターの育成を開始するとともに、平成22年度末には、今後の生涯学習・社会教育を推進するためのネットワーク化（体制整備）に関する方針を策定し、「今後、関係機関や団体・組織等とのネットワークを構築し、学びの更なる充実と住民自らの地域貢献を支援するための体制づくりを推進する。」としました。

こうした動向を受けて、下記の４者による設立準備委員会を設置し検討を行い、平成23年12月18日に、「大分県『協育』ネットワーク協議会」を設立し、協議会の目的の実現に向けて、「情報の共有」及び「地域での総合的・効果的・日常的・継続的な活動の相互支援」、さらに「『協育』の啓発」に取り組むこととしました。

大分県『協育』ネットワーク協議会設立
準備委員会

○大分大学高等教育開発センター
○NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット
○東国東地域デザイン会議
○学校法人渕野学園　富士見が丘幼稚園

※会則や事業等の詳細は、大分県『協育』ネットワーク協議会のホームページに掲載しています。

２．協議会の概要（会則から）

(1) 組織

本協議会の会員は、大分県内の機関、団体・グループ、企業等の組織をもって構成する。

(2) 目的

近年の子どもたちに関する様々な課題に対応するため、会員自らが主体的に活動することや連携協力して活動することなどを促進し、地域社会における効果的な教育支援活動を日常的に行う「教育の協働」の推進のために、各種組織のネットワーク化を図ることを目的とする。

３．会員（平成24年3月末現在：32組織）

大分大学高等教育開発センター	大分県中小企業家同友会
東国東地域デザイン会議	NPO法人ふれあい囲碁ネットワーク大分
NPO法人こどもサポート「にっこ・にこ」	九重ふるさと自然学校(一般財団法人セブンイレブン記念財団)
学校法人渕野学園　富士見が丘幼稚園	大分県生涯教育学会
明日を見つめる'あき21	NPO法人えにしネット21
あきツーリズム研究会	NPO法人923みんなんクラブ
NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット	イオン九州株式会社イオンパークプレイス大分店
うーたの会	プラス・エコ
つくみ環境美化グループ	佐賀関観光ボランティアガイド協会
株式会社 翼	大分県生活学校運動推進協議会
国東市くにみグリーンツーリズム研究会	株式会社　デンケン
NPO法人大分環境カウンセラー協会	有限会社　いこいの村くにさき梅園の里
NPO法人エー・ビー・シー野外教育センター	大分キワニスクラブ
地域創造ネットワーク	株式会社　パークプレイス大分
番匠川流域ネットワーク	株式会社　地域科学研究所」
ウミネコの会	NPO法人共に生きる

４．事業の概要

会員から選任されたNPO法人大分県「協育」アドバイザーネットが事務局を担い、大分大学高等教育開発センター、大分県「協育」アドバイザーネット及び本協議会の三者が常に連携をとりながら次の3つの事業を柱として実施することとしています。

(1) 情報の共有と「協育」活動の啓発

上記の三者の情報収集・提供を各ホームページを通して行うことはもとより、将来的には、会員外の県内各組織の様々な情報を「協育」ポータルとしてホームページ上にサイトを立ち上げて、一元的な情報提供を行うことを目指している。

(2)「協育」活動を啓発する「協育見本市」の開催

年1回、学習活動を支援する上記の会員を中心に各種団体・グループ等が連携して、県内の各種組織が出展し「協育」を啓発するイベントを開催する。

(3)「協育」活動への相互協力

会員が実施する各種活動について、趣旨に賛同できる事業へ相互に協力・共催を行い、会員の活動の充実を図る。

《資料》

☆NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットロゴマーク

①ロゴマークは、中央の三日月を正方形として全体構成し、3つの「力」は月の中に、重ならずにつり合いを保ちつつ、きちんと配置されています。
②「力」は学校・家庭・地域社会を意味しており、上の「力」は少し大きく、現在の学校教育の重要性を示し、下の家庭と地域社会が支援・協力して（「三日月とベクトル」の十は3つの力のプラス〈合わせる〉を表す）子どもを「育」（月〈三日月〉を表す）むことを表しています。
③赤・青・黄・緑は光・色の３原色であり、うまく配合されることによって生まれる白（光）と黒（色）を意味し、様々な彩りをつくる可能性を示しています。

☆大分県「協育」ネットワーク協議会ロゴマーク

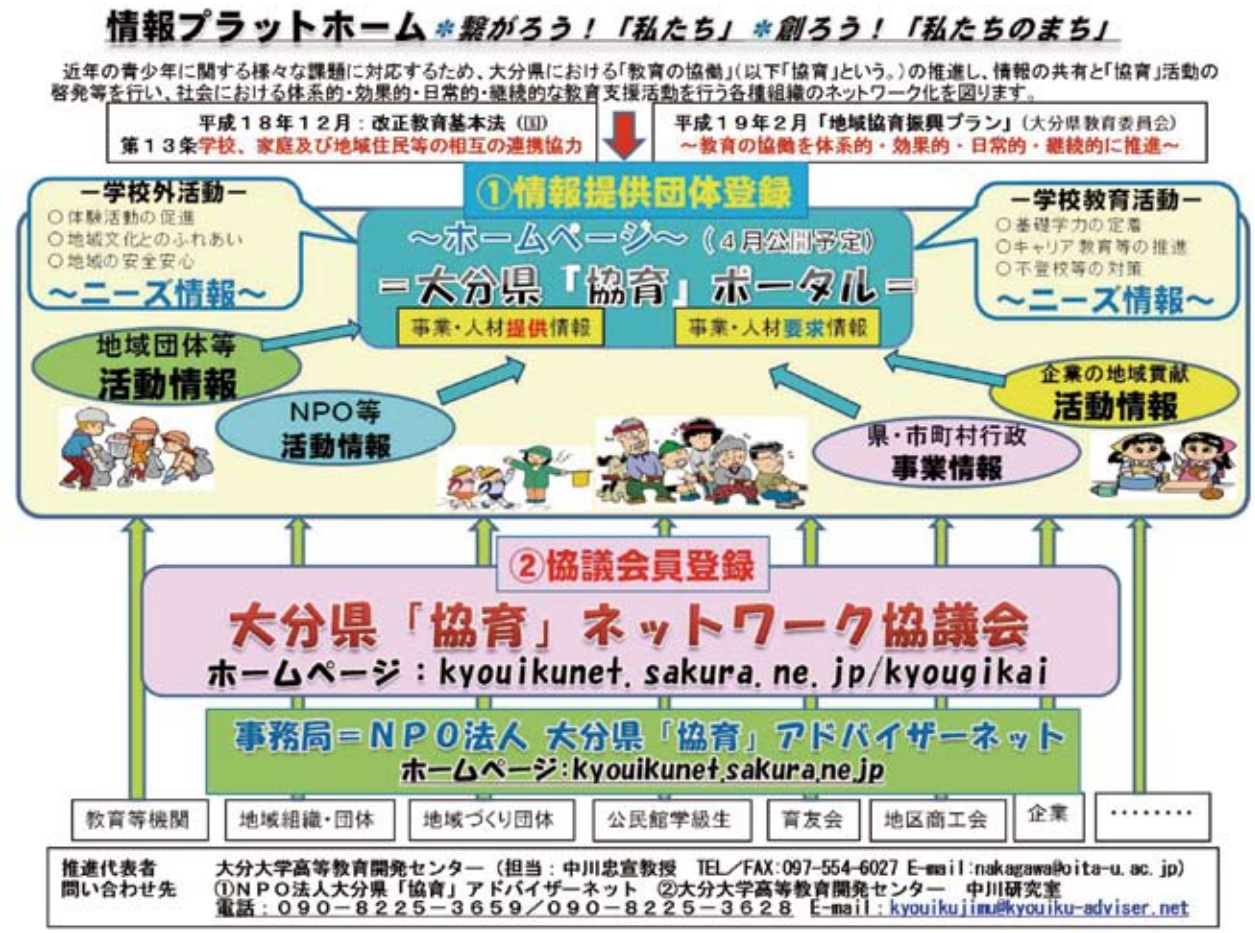
Kyouiku-network-kyougikai

①大分大学旦野原キャンパスから別府方面を望むと、全ての子どもたちを芽生えさせる役割を担う各種機関を象徴する新緑の由布山（春）、子どもたちをしっかり地域に繁茂させる学びの場として地域の団体・グループを象徴する青々と茂る鶴見山（夏）、紅葉で染まる高崎山（秋）は最終的に輝く社会人を育てる企業を象徴しています。
②この3山の連なりと、県鳥であるメジロ（ウグイス色）が3山に広く生息している様子を図案化したものです。
③この3連山のように繋がって、大分県の発展のために教育の協働を推進していく私たちの協議会の方向性を示しています。

３．情報プラットホーム「大分県『協育』ポータル」からの発信

大分大学高等教育開発センターが進めている「協育の協働」の取り組みは、大分県教育委員会の方針と並行した、具体的な県レベルでのネットワーク化の推進です。**コーディネート機能を発揮・支援する**「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」を中心にして、**情報の収集・提供と活動の協働を目指す**「大分県『協育』ネットワーク協議会」、その**両者が協働した様々な啓発活動**を日常的・継続的に進めていくことが大切だと考えています。地域レベルでの取り組みを支援し、推進するため、そのモデルや活動情報を全県レベルで収集し、提供することを目指しています。そのための人材・組織とのネットワーク化を進め、様々な情報を提供していくために、ホームページ上での《情報プラットホーム》「大分県『協育』ポータル」を建設中です。県内の供給情報（事業・行事情報）と需要情報（求める情報）を一体的にホームページ上でマッチングする試みです。

今現在は、事務局的な「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」と、活動のネットワークを目指した「大分県『協育』ネットワーク協議会」のホームページがありますが、新しい情報提供システムのポータルを構築し、大分県における情報提供のプラットホーム機能の充実をめざしています。



☆「協育」事例集☆

教育の創造　～地域「協育」のススメ（第１巻）～

発　行　　平成24年3月
編　集　　大分大学高等教育開発センター
〒870-1192　大分市大字旦野原700番地
Tel／Fax(097)554-8509
http://www.he.oita-u.ac.jp